

# 幼 兒 教 育

第 三 十 八 卷 六 月 號 第 六 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內  
日 本 幼 稚 園 協 會

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可  
（每月一回）五月十五日發行

昭和十三年五月十三日印刷  
昭和十三年五月十五日發行

定價三十五錢

廣島文理科  
大學教授

文學博士久保良英著

菊判洋綴紙數三百頁  
定價金二圓八十錢

送斜廿一錢

新刊

# 兒童の精神構造と指導

本書は心理學上より兒童の精神構造を科學的に解剖し、體係を立てて以て兒童教養の根本義を確立せるものである。兒童の教養は次期の國家の消長を決するものであるが、特に現今我國は非常の時局に立ち何事にも國民總和の力を以て當るべきの秋である。著者はこゝに大に感ずる所あつて、世の教育家父兄の爲に特に本書を著したのだ。先生は我邦心理學界の泰斗で、本書は其深奥なる學問と豐富なる經驗との完全なる融合である。左に其大綱を擧ぐれば……一幼兒の精神構造 二玩具の選び方 三言語と文字の交友についての注意 五問題の子供の導き方 六家庭に於ける知育 七美的情操陶冶 八道徳教育 九宗教教育……一般教育家は勿論一般識者の必讀を望む。

東京高等師範學校教授

文學博士

小野島右左雄著

# 心理學要説

頁百四數紙判菊  
錢十五圓二價定  
錢一十二料送

教育の基礎となる  
新しい心理學説

文檢要書

心理學の問題は嘗ての機械説より生氣説、準機械説等幾變遷を経てゐるが、體制に於て重大なる進歩と新らしい分野の開拓とを意味するものである。之は人間科學の諸領域に當つて著者は本書に於て單なる紹介や學説の羅列をさげ、専ら見方を教へ考へるに當つて、傍諸家の說に於て適したる一方其内省よりして東洋思想の色彩も又濃厚で論を説き見透しを與へようとしてゐる。しかして全卷を通じて一貫するに其獨特の精神生活を現代の文檢受驗の成果に基づいて叙説しようとする試みたと本書の卷頭に述べらるが、此の意味に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

振替電話 東京三三三番 七二四八

店書館文中

發行所 東京市牛込區 四七

## 新刊豫告

本會は左の新著を最近に於て出版の豫定で準備を進めてゐます。詳細は次號に於て發表申し上げますが、いづれも今夏の講習會に關係あるテキストもなるべく、諸君の御期待を乞ひます。

○幼稚園に於ける觀察の要項及びその實際につき東京女師高等師範學校附屬幼稚園の研究になれるもの

○幼稚園新唱歌として倉橋惣三氏の作詞數篇に諸大家の作曲せられたるもの。協會懸賞募集當選新唱歌數篇に小松耕輔氏の作曲せられたるもの。いづれも全國幼稚園に迎へられるもの

昭和十三年六月

日本幼稚園協會

# 第九回夏季保育講習會

我が講習も既に九回を數ふるに至りました。何時も盛況を見る事保育界の爲め又主催者として大いに力強く且感謝する所であります。今年の第九回講習は殊に時勢に鑑みて其趣く所を考へ少しでも我が保育界に一新企畫を作り國家の爲め、幼児の爲めに盡したい存念で御座居ます事を御了承下さい。

一期 七月廿七日より七月三十一日迄五日間

二期 午前八時ヨリ十二時  
午後一時ヨリ五時

## 三、科目と講師

1、幼稚園に於ける談話と其の實際 (六時間)

東京女子高等師範學校 教授 倉橋惣三先生

先生は我國保育界唯一の指導者として既に周知せらるゝ所其深遠なる學理に基き極めて平易に講述して下さい故に必ずや大いに得る所ある事を確信して居ります

2、保育の實際を中心としたる幼児の心理 (六時間)

東京帝國大學 助教授 青木誠四郎先生

先生は幼児の心理については權威者であり「問題の子供」については有名な方であります。こんどは幼児の日常生活の上に表はれ来る種々の相を捕へて之が本質を闡明にし其種類を述べ其取扱方處置の方法を述べていただきます。ケンカとか運動とか性格の異常なるものとか其他多くの表れを取り又精神鍛練について或は絶對音感教育とか之れにも心理的に説明を與へらる。以上最も新らしきものを與へられ保母の苦惱を水解せしむる爲めに教示さるゝが故によくノートに收められ度尙常に保母諸姉が疑問とせらるゝ幼児生活の問題あらば七月十日迄に本會宛提出あらば自他を益する事大なるべし

3、幼児の向上と歐米社會施設視察談 (四時間)

醫學博士 廣瀨興先生

4、幼児に與ふる唱歌の唱ひ方 (六時間)

東京音樂學校 教官 梁田貞先生

5、幼稚園に於ける童話劇の取扱方 (二時間)

東京高等音樂學院 教授 岡本敏明先生

國歌祝祭日唱歌愛國行進曲等の標準歌法、幼稚園に適切なる歌曲遊戲に使用する新唱歌の指導

# 6、ピアノ・オルガンの指導

東京高等音楽學院教授 同 教 官 松 土 本 川 う 正 浩 先生 先生

# 7、律動遊戯及新唱歌遊戯

國歌祝祭日唱歌愛國行進曲の伴奏の弾き方  
會員各自希望の曲(幼稚園唱歌の伴奏律動及新唱歌遊戯其他必要なる曲)を練習用意せられたるものに限り指導す  
東京昭和保护養成所長 瑞穂幼稚園 土 川 五 郎 先生

體育を主眼とし幼児の身體の發達に重きを置き  
きを排除し全くごも自身を樂しましむる遊戯 本年新作のもの二十種の外律動遊戯を順序正しく正確に教授し更に既作にして經  
驗上幼児の好んでなすものより數種を擇みて指導す  
◎手技 當養成所の創作にかゝる手技の發表と説明を適當の時間に行ひます

# 四、區 定 員 分

甲之部 1、2、3、4、 乙之部 4、5、6、7  
五、割 引 乘 車 券 各 三 百 員

會費を添へてお申の方へお送りいたします。七月二十日迄に申込になりませんと間に合ひません。  
すから七月十日迄に願ひます。切符購入期間は七月十三日より八月一日迄通用期間は八月十四日迄  
市内及近郊から省線でお通ひの方には鐵道規則改正の爲め御氣の毒ながら五割引は使へません。 振替は到着迄一週間かゝりま

鐵道割引の規定が改正されました。即ち五十キロから夫れ以上の旅客に限られました。即ち五十キロか夫れ以上の賃金  
を拂ふ客に使用されるのであります。品川驛を基點とすると東海道は茅ヶ崎驛より西の人横須賀線は田浦中央線は淺川信越線は北  
本宿、東北線は白岡、常磐線は取手房總線は四ツ街道と蘇我より使用されるのです。大井町驛を基點とすると、西の方は二キロ四分  
減じ北の方は二キロ四分を加へて計算して五十キロになればよいのです。

# 七、會 場

瑞穂幼稚園 東京市品川區大井原町五、二〇八  
省線大井町驛下車城南バスにて原又は水神前下車

# 八、會 費

甲之部 參 圓 乙之部 參 圓 兼修 五 圓  
本校寄宿舎を充用 一泊二食壹圓參拾錢

# 九、注 意

收容人員に限りあり必ず前以てお申込を乞ふ 宿舎さるゝ方は敷布御持參下さい  
1、一度納付せられた會費は理由によらず御返しいたしません。2、振替は一週間後にこちらに到着しますか  
ら急ぎの方は小爲替の方が宜敷いです。振替は東京六九二四番土川五郎です

# 主 催 東京昭和保母養成所

責任者 土 川 五 郎

昭和十三年六月

東京市品川區大井原町五二〇八  
電話大森四二二〇番 振替東京六九二四番

# 第拾回保育夏期講習會

主催 佛教保育協會

後援 佛教各宗々務所

東京市大塚市民館

一期

昭和十三年七月二十七日より三十一日まで(毎日午前八時より午後四時まで)

會場

東京市小石川區大塚辻町 東京大塚市民館(舊稱大塚市民館) (市電、市バス 大塚辻町下車約一丁) (省線 大塚驛下車約四丁)

一、講師及科目

一、信念に生きよ (二時間)

編見高等女學校長  
ドクトル オブ、フィロソフィー

中根環堂氏

生甲斐ある生活をせんせば先づ信念に生きることが大切であります。まして平素第二の國民養成に當つておられる保母さんとしては最も心得ねばならぬこと、信じます。大本山總持寺經營で神奈川縣下唯一の鶴見高女に於て平素千七百餘名の生徒の薰育に當つておられ帝都女子教育界の權威であらるゝ先生が特に御出講されて懇切に御説示されることになつております。

二、時局と保育 (二時間)

東洋大學教授  
本會保母養成所教頭

關寛之氏

三、保母としての一般衛生と幼兒の榮養 (四時間)

醫學博士 竹内茂代女史

昨年の講習には幼兒の救急法縫帶法に就て御指導されましたが本年は保母として心得べき一般衛生(特に結核等)幼兒の榮養に就て御教示を頂くことになつてゐます。

四、童畫の鑑賞と指導 (四時間)

武井武雄氏

幼兒の畫は子供の生活の偽らざる表現であります。そしてその畫の中から子供の本来の姿を発見することが出来るのであります。この信念を以て平素童畫を研究し發表せられておる先生が本年は特に御出講を頂いて親しく御指導を受くることになつております。

五、唱歌の教へ方、導き方 (四時間)

四家文子女史



# 保育夏期講習會

今や非常時！國民精神總動員の秋。銃後を護る者の任務又重大であります。殊に第二國民の養成に従事する教育者は「明日の日本」を脊負つて起つ覺悟がなければなりません。

本所はこゝに想ひを致し、保育報國の念願の下に、保育従事者の修養研究を深め、日常保育の改善向上を目標とし、左記に依り講習會を開催する事に致しました。奮つて御參加下さい。

昭和十三年六月

主 催 帝都教育會附屬教員保姆傳習所  
後 援 帝都教育會附屬教員保姆傳習所 卒業生合同クラス會

## 要 項

一、期 間 昭和十三年七月二十七日より二十九日迄三日間（毎日午前八時ヨリ午後四時迄）

一、會 場 東京府女子師範學校講堂（東京市小石川區竹早町八番地）  
市電 市バス同心町下車

## 一、講師及科目

(一)、非常時に處する保姆の覺悟（一時間）

東京府女子師範學校教諭 梯 英 雄 先生  
帝都教育會附屬教員保姆傳習所副主幹

(二)、談話の理論と實際（三時間）

東京府女子師範學校教師 井 部 正 先生  
帝都教育會附屬教員保姆傳習所講師



(一)、お話遊びの材料及其の取扱 (五時間)

東京府女子師範學校附屬幼稚園主任  
帝都教育會附屬教員保姆傳習所講師

長谷川みつ先生

(二)、音樂 (三時間)

實地——新しき幼兒の爲の唱歌  
理論——簡易なる伴奏のつけ方に就て

東京府女子師範學校教諭  
帝都教育會附屬教員保姆傳習所講師

大和田愛羅先生

(二)、幼兒遊戲 (七時間)

島田兒童舞蹈研究所所長  
帝都教員會附屬教員保姆傳習所講師

島田豊先生

一、講習料

幼稚園保姆

金貳圓也 (出席の際御納め下さい)

一、定員

三百名

東京市小石川区表町八十八帝都教育會附屬教員保姆傳習所内  
保育夏期講習會事務所

一、申込所

七月二十五日迄 (但し定員超過の場合は期日前に切ることがあります)  
一泊二食付金壹圓五拾錢にて保姆傳習所寄宿舎をお世話致します。  
(御希望の方は早目に前以て御申込み下さい)

一、講習時間割

日	時	内容
二十七日	八時—九時	開會式
二十七日	九時—十時	大和田講師 講
二十七日	十時—十一時	井部講師 講
二十七日	十一時—十二時	長谷川講師 講
二十七日	十二時—一時	同上
二十七日	一時—二時	同上
二十七日	二時—三時	同上
二十七日	三時—四時	同上
二十八日	八時—九時	大和田講師 講
二十八日	九時—十時	井部講師 講
二十八日	十時—十一時	島田講師 講
二十八日	十一時—十二時	同上
二十八日	十二時—一時	同上
二十八日	一時—二時	同上
二十八日	二時—三時	同上
二十八日	三時—四時	同上
二十九日	八時—九時	井部講師 講
二十九日	九時—十時	大和田講師 講
二十九日	十時—十一時	島田講師 講
二十九日	十一時—十二時	同上
二十九日	十二時—一時	同上
二十九日	一時—二時	同上
二十九日	二時—三時	同上
二十九日	三時—四時	同上

講師の都合に依り多少時間割の變更があるかも知れませんが御諒承願ひます。

# 新刊

倉橋惣三作詞  
小松耕輔作曲

戸倉ハル振付

## 日本の旗 日の丸の旗

色刷表紙四六倍判音譜及び振付  
説明  
定價 送料共一冊 金參拾錢  
前金(振替或は參錢郵券)を添へ  
冊數及び送先き明記申込次第直  
に送本す

此の時局、幼兒兒童に何を唱はせませうか。どんな遊戯をさせませうか。本會は、今日此の新しい唱歌と遊戯とを全國の幼兒兒童の前に贈り得ることを最も欣快とするのであります。願はくは、皆さまのお力添へを俟つて、幼稚園に、學校に、家庭に、街頭に、津々浦々に、此の唱歌遊戯の流布を見るに至り得んことを。之れが本會の遠慮のない望みであります。

尙、此の刊行によつて得た金額は、國防費に獻金致したく、既に金百圓を獻金致しました。どうぞ此の趣旨にも御共鳴下さつて、尙ほ一冊でも多くお購求下さい。又廣くお勧め願ひます。一冊の御購買は即ち同時に國防獻金となるのであります。若し各幼稚園が此の意味に基いて、取りまごめて御註文下さるようのごまごまごして頂ければ、此の上ない幸であります。そのために表紙も美しい色刷りの家庭向きにして置きました。右本會の二つの希望を御協賛願ひます。

發行所

## 日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五  
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内  
振替口座東京一七二六六番



號六第 育教の兒幼 卷八十三第

—(次 目)—

口繪

卷頭(六月のみぎり)……………倉橋惣三(一)

こぎもの意味……………石川謙(二)

幼稚園は教育に對して何を貢獻し得るか……………カサリン・アカナ(五)

水棲昆蟲記—みづすましの蘭造り—……………久米又三(九)

變つた性質の幼兒について……………及川ふみ(六)

齒ミ食物……………湯淺泰仁(三)

第三回フレイベル賞審査發表表……………(三)

第三回フレイベル賞、幼兒童話審査に就て  
審査員諸氏の御意見御感想

選後の感想……………小川未明(二五)

忠實なる作品を歡ぶ……………岸邊福雄(二七)

苦言……………倉橋惣三(二六)

選者の一人として……………新庄よしこ(二九)

入選童話

さいごうばらひ……………S・K(三三)

春が來た……………杉山よね(三〇)

ニコくダルマさん……………佐藤久子(三二)

「劇あそび」について……………山村きよ(三六)

時局の保育・時局の影響……………島根縣女子師範學校附屬幼稚園(三六)

今夏の文部省主催保育講習について……………(三六)

本會主催夏期講習會に就て……………(三六)

ハイデュー(ヨハンナ・スピリ原作)……………津田芳雄譯(三六)

倉橋惣三著  
育ての心

定價 送料

東京、神田區駿河臺三丁目六

一、五〇〇、一四  
刀江書院

倉橋惣三著

幼稚園保育法真諦

東京、神田區神保町一丁目六七

二、五〇〇、一六  
東洋圖書株式會社

倉橋惣三共著  
新庄よしこ著

日本幼稚園史

三、八〇〇、二〇  
同上

倉橋惣三著

幼稚園雜草

東京、日本橋區、大傳馬町

二、五〇〇、一四  
内田老鶴圃

日本幼稚園協會編

幼兒に聽かせるお話

三、八〇〇、一四  
同上

日本幼稚園協會編

幼兒の樂しむお話

二、八〇〇、一四  
同上

日本幼稚園協會編  
幼兒發達検査

東京、神田、神保町

一、〇〇〇、八  
フレールベル館

淡路圓次郎著

幼兒性行評定尺度

一、〇〇〇、二  
同上

倉橋惣三監修  
保育叢書

菊池ふじの著  
徳久孝子著

幼兒のための  
人形芝居脚本

一、〇〇〇、二  
同上

及川ふみ著

幼稚園の手技製作

一、〇〇〇、二  
同上

膳真規子著

自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二  
同上

和田實著

實驗保育學

一、〇〇〇、二  
同上



ぶ遊こ水

で庭の園稚幼屬附

# 幼 児 の 教 育

昭 和 三 十 三 年 六 月

## 六 月 の み どり

六月のみぎりには、ごこみなく落ちついた色が出る。四月、五月の草木には見られなかつた葉色の落ちつきがある。落ちつきさいふご落ちつき過ぎるが、若葉さいひ新緑さいはれた頃の、まだ餘りに新らしく、なにごなくわくくでもしてゐるやうな興奮の色もしつまり、そわくごはしやいでゑもゐるやうな眩しげな光澤もおさまり、自ら此の庭のものになりきり、此の庭を我がものご安んじきつてゐるやうな落ちつきが感じられる。

それご丁度同じやうな落ちつきの見え出したのが、六月の園児達の顔色だ。新入園児の顔色には、まだごうも、よそくしげなごころがあり、幼稚園に安んじきつてゐないごころがあり、そのいぢらしさが、われらの心をも安んじさせないごころがあつた。

それが此頃、園児達の顔色が何んご大丈夫な落ちつきを見せて呉れて来たごころか。庭のみぎりご同じく、新鮮潑刺たるまごでの落ちつきを。(倉橋惣三)

# こどもの意味

東京女子高等師範學校教授 石川

謙

一

幼児期をやうやう巢立たせて、この頃やつこ兒童期に送り込むここの出來た子供を三人まで持つ私ではあるが、それでるて、語るに足るやうな體驗をついぞ擱み得なかつた怠惰な私でもある。子供の二人までが、幼児期に於いて、可なりに長く可なりに重い病氣にかゝつて、醫者に縋りもし神に祈りもして、あはてふためいた見苦しい生活を生活したこどももありながら、自分達の養育振りに反省のメスを加へようこもせず、「試練」だの、「與へられた運命だの」こもあつさり片付けて來た愚かしい私である。今にして「幼児の教育」を語る資格がないし、また其の圖々しさもない。

今から考へて見るに、子供さいふ存在に對する私の考へに物足らぬところがあつた。こ言ふよりも、寧ろ或る意味ではまるつきり誤つてゐた。心理學的な醫學的な存在としての子供——大人ではない所の子供さいふ程の意味での子供さいふ觀念は、それは或は心得てゐたつもりである。無論、教育學の書物さか教育史上の大思想家の意見さかから仕入れた極めて觀念論的な、理屈ばつた觀念には相違なかつたが……。かうした意味での子供、換言するに子供の心理學的・醫學的な條件を眼中に置いた取扱ひ(養育法)は、それ自身正しいものであり、當にさうあらねばならぬものではあるが、それだけのこみに心を奪はれてゐる養育は、實は大きな「物足りなさ」を胎藏してゐるやうに思はれる。一體、醫學的・心理學的條件を理解し會得して、これに適合するやうに親たる我れ等を働かせずには措かぬ力は、抑々何であるであらうか。言ふまでも

なく母性愛であり親の慈悲心であること、苦もなく答へるやうに我れ等は考へ慣らされてゐる。この場合、母性愛こそは凡ゆるものに先行し、あらゆる知性に指令を與へる最後の權威者になつてゐる。合理性に對する非合理性の優越が前提になつてゐる。然し、母性愛のみで、果して合理性の正しき發動をいつも保障することが出来るであらうか。我れ等が「物足りなさ」を感じるこゝつたのは、實にこの點である。「子供」をいつでも「我が子」にして獨占的に感じてゐなければ淋しさに堪えぬ「母性愛的なもの」以上に出て、子供そのものに内在する光輝を、脆まついて母さへも父さへもが仰ぎ見る峻嚴な、神聖なものを認めなくてよいであらうか。

## 二

かう言つて來ること、人は直ちに西洋教育の思想に做つて、子供そのものゝ中に於ける神的なものを想記するであらう。然しそれは、超人間的な唯一の神こと、一切が平等な無数の人間ことから、この世界が出来てゐること考へる西洋的信仰に於いてこそ成立する信念である。家族制度の上に立ち祖先崇敬の信念に生きる我が國現實の社會に、びつたり當嵌まる信念ではない。この點について我れ等は、より現實的な、より日本的な、子供教育に對する原動力觀念を、我れ等の先覺者の中に見出すことが出来る。そしてそれに二つの類型があつて、中江藤樹と貝原益軒によつて夫れ夫れ代表せられる。藤樹によること、我が身は父母の分身であり、子供は我れの分身であるから、子供に於いて我れ等は、我れ等の父母、祖父母、曾祖父母を見出すことが出来る。子供はそれ故に子供ながらに先祖である。遠い過去から受け繼いだ生命の一齣であること共に、永遠の將來に向つて求むべき理想の、今のこの我れよりも一歩前進した（理想に近付つた）状態に置かれなければならぬ筈の存在である。我が子ながらにして我が子でない。我れと共に、我れより進んで（先祖の理想としたものに近づくなること論理的な意味で）、一層「先祖的なもの」を考へることが出来る。それ故に、子供を愛し子供を導く心は、先



祖に事へ先祖に奉ずる程の意を籠めた真劍味、莊嚴味がなければならぬ。かくてこそ、子供の教育は人間第一の課題であり任務であつて、醫學でも心理學でも、あらゆる科學や技術に援兵を求める謙虛な氣持が生れ出づるのである。こいふのが『翁問答』の中で藤樹が説いた主張を、現今の我々の言葉で敷衍したものである。貝原益軒は、子供の體と子供の心とは、その構へも働きも大人のものと同じでない特異のものがあることを發見し、詳細に組織的に研究した我が國最初の學者である。ルソーが西洋に於ける「兒童の發見者」であると言はれる意味に於いて、益軒は我が國に於ける「兒童の發見者」である。彼れによる子供の「子供のなもの」の奥に、やがて綻びて花を咲くべき「大人のなもの」が疊み込まれてゐる。その「大人のなもの」を言ふのは、眞の意味に於ける人間的なものゝことで、父母も持ち先祖も持ち、天地も持つところのものである。歴史的に漸次に發展して來てゐる普遍者、一般者のことである。子供に内在するこの歴史的な一般者を見出し、引出す仕事は教育であるが、教育はそれ故に、敬虔な念から出發さるべき事天の業なのである。かう眺めて來ると、藤樹にも益軒にも、子供に於ける醫學的・心理學的な法則を、兒童生活の實際にまで引出して來て實生活化させる指令の發動者、唯單なる母性愛のみに求めなかつたことが判る。彼れ等は、母を越え子をも越えて、共に振ひ立たせる指令者を、母と子との兩者に胎藏する一層莊嚴な合理的な權威に求めたのであつた。極めて日本的な魂姿に於いて……。

（昭和十三年六月一日稿）

# 幼稚園は教育に對して何を貢獻

## し得るか

頌榮保育專攻學校 カサリン・アカナ

私達は近頃幼稚園をして義務教育の一部分たらしめんことを企圖に關して幾多の議論を耳にするのであります。若しも文部省がかような教育段階を決定するならば幼稚園は確かに尋常小學校一年生と密接に協力する時代に入らざらば、若しもこの進歩的教育段階が採用せられますならば、幼稚園教育の動向は如何なるものでせうか。恐らく幼稚園が自己持前の明確なる特質を失ふ程に小學校からの影響を受けるであらうし、さもなくば尋常小學校一年生は之に反對に幼稚園保育法に著しく影響せらるゝ所があるだらうと存じます。シャトルのある教育者の如きアメリカに於けるこれと同様な問題に就いて論じて居るのでありますが、即ちその趣意は小學校と幼稚園とは一國の小國民の精神身體及び靈性を教養をなす爲に各自の教育的努力が一層緊密になることが出来るだらうか云ふ事で御座います。私はこの一文に於きまして、小學校及び幼稚園兩者提携に對して幼稚園が寄與し得るだらうと考へらるゝ事柄に就いて少々述べて見度いと存じます。幼稚園では教育材料に應用せらるゝものとして『恩物』なる語を好むのでありますが、フレールは我々が遊具と稱するより以上の遙かに偉大なる感化を兒童の世界に貢獻したのであります。従つてこの幸福なる教育者團體が教育世界に對して貢獻した二三のものは何かについて考へて見度いと存じます。

第一の貢獻云ふのは『子供の園』なる名稱を與へたことでありまして、これは花を咲かすべき幼なき蕾がある所であり

まして、児童心理學者の意識の中に土壤の大切なことを喚起致したことで、換言しますならば、子供が成長する外部的環境や幼なき成長せんごする植物の根や枝を養ふ土壤を持分致して居ることで御座います。

第二の貢獻は、教育なる概念が假令成長の波には時によつて高低があるにせよ、繼續的過程としての教育觀念を與へたことであります。

第三に幼稚園は教育世界の中にあつて成長の方法として自己活動なる觀念を育成して來たので、その點より致しまして兒童に云ふ觀念は決してその上に文字を書き得べき蠟板の如きものではなくして、自己の運命の大部分を創造する生きて成長しつゝある有機體であるに云ふ觀念で御座います。

第四に、幼稚園が教育に對して與へた今一つの貢獻は教育過程に日光及び空氣を持込んだことで、人間の成長が、人間以外の他の自然物の成長の様態と同じく入念に耕された土壤に依存するのみでなく、多量の日光や成長して行く植物の世話をする愛する園丁に依頼せねばならぬに云ふ觀念の使ひ方を取入れたことあります。

以上述べましたこれら事柄について一の興味あることは、斯様な事柄が幼稚園に由りて發見せられたものでなかつた事で御座います。幼稚園以外の人々が既に斯様な事柄を持出して居りました。然るに之を適用して、『子供の園』まで稱せらるゝ程に教育體系の中に取り入れたのは即ちフリードリッヒ、フレーベル其の人でありました。何故か云ふに『子供の庭』は兒童達の中に新生命の種子を植え、その種子より生え出づる植物を養ひ、花蕾を妨げる雜草を刈取り、一般に植物をして充分なる美し實を結ばしむるからで御座います。

更に自然過程として兒童の發育に興味を有する故に、幼稚園は常に多くの子供達の中にも尙個性的特質を育成することに非常に重點を置いて來たのであります。然るに幼稚園教師は自己の職責に關するこの大原則を見失つて、謂はゞ小さい植物を並べて、各々の子供に千篇一律に同じ知的食物を與へ、各々の子供が同じ色と形とを具へた果實と花とを要求す

る云ふが如き、形式主義の中へ自身を陥れて居る様な時代でありました。

然るに近年に到つて幼稚園世界は斯る形式主義の連鎖を破壊致しまして、子供達各自の個性研究の心理學の學究に、而して心理學的成長の法則を個人の場合に應用する様にすべての教育者達を指導して來たのであります。この指導が教育過程のすべての段階に對して寄與せる恩恵が眞にすばらしいものであつたことはすべての諸學校は勿論大學までその追求する幾多の教育觀念に於ける開拓者となつたことであります。従つてこれら二三の恩恵及び教育時期に於ける各段階の相互關係を一括して述べて見やうと思ふので御座います。

(イ)發達は繼續的過程であり、従つて其自體、向上せんとする衝動の種子を有するものであるこの觀念であります。されば各自の能力によつて自己の思考生活を活動せしむべき機會が賦與せられ、且つ被教育者が發達の個人的段階に於いて考慮せらるゝ云ふことは各自の神聖なる權利であります。

(ロ)自己活動が成長の法則であり、且つ被教育者は學習過程に於いて自己の意志を働らかす場合のみ自らは何事をも成就し得る云ふ觀念であります。この様な觀念は工業學校にて従事せらるゝが如き實際的研究にのみ應用せらるゝのみならず、高等諸學校に於いて經濟學哲學の諸問題の如き推究を必要とする思想に關する獨創力にも應用せらるゝのであります。今日も尙大體に於いて舊式なる講義制度を墨守する大學に於いてすらも、知名の教授が教室の前方を遠く見ながら、自己活動的創造的思索の中に自己の知識を取扱ながら、従つて社會に關する斯る結果の方面を觀察する如き習慣を彼等の學生達に形成せんことを意圖するのであります。従つて小學校より大學に到る迄すべての學校に於いて私達の小國民に與へらるゝ訓練、例へば健康を與へんとするあらゆる體育運動、被教育者の中に表示せらるゝ愛より出づるすべての關心事が、他日圓滿なる成人として我が日本の社會に於いて彼等をして各自の立場に立たしむべき準備を目的とするものであるこの觀念の上に、益々重點が置かれる様になつて居るのであります。従つて彼等が他日圓滿なる成人となつた曉には、自己の

強壯なる身體、理知に富める精神及び自己の國家に對する尊嚴なる愛國心等を、個人の場合と同様に、偉大なる貢獻を各自がなし得る方法に由りて如何様に取扱ふべきかを知るに到るのであります。

さて教育世界は年を経るにつれて、一人の教育者の他の者より學んだものを進歩させるものであつて、最後に天才が生れて、種々雑多の源泉より人の注意を惹く實際的系統を組織だてるに到つたのであります。ペスタロッチは學校は愛が經驗せられる場所であると思想に對して責任を感じた人であります。私達は幾多の事柄の故に、往時兒童が處罰せられたかを読む時に愛の觀念が如何に大變化を及ぼすものかを理解するのであります。フレーベルは嘗てペスタロッチに就いて學び、學校愛によりて彼と彼の子供の庭に關與するようになったのであります。斯る理想を抱いて幼稚園は教育世界の全範圍に互つて影響を與へたけれども、教育が繼續的なものであることを發見するに到らなかつたのであります。プラトンはソクラテスの口を藉りて既に大昔に之を語つて居ります。然乍ら幼稚園は自身が證據立てられなかつた爲に、その原理の有効性を證據立てんとして永年の訓練をして今日に到つたのであります。

人間の意識の背景にある大なる觀念は、例を以て云へば人生スペンヤリゼーション云ふ海岸に向つて特殊スペンヤリゼーション化スペンヤリゼーション云ふ繼續的に寄せる來る波浪スペンヤリゼーションとなつて大洋がその人生の海岸を洗ふに類似して居ります。斯る波浪が全體的に繼續するのは、夢の如くに慣習スペンヤリゼーション云ふある斷崖の底部を徐々に破壊して行くのであります。然し遂に最後の大波浪が來りて之を覆没して仕舞ふのであります。『私達は幼稚園の來るべき次の百年の爲に謙遜なる精神を以て將來を展望したいもので御座います。又私達は變化の思想を保證し得ない完全スペンヤリゼーション云ふ様なことを決して誇つてはならないと思ふので御座います。私達はフレーベルの子供の庭の生きて成長しつゝある精神に自己を獻げることによりて最高の榮譽をフレーベルに歸すべきことを忘れてはならないと存じます。私達は幼稚園の外形的形式ではなくして寧ろその精神が教育體系の全體に對して、從來よりも更に一層高遠なる方法によつてこれらの賜物を取扱ふ爲に特殊の貢獻を致し度いもので御座います。』

# 水棲昆蟲記

——みつすましの蘭造り——

東京女子高等師範學校教授

久 米 又 三

マリさんが未だ吾々の研究室に居る頃の事です。マリさんは水に棲む昆蟲が此の上もなく好きな様でした。私もごちらかみ云へば、陸に棲む者よりも其の方が好きです。陸に棲む蟲を眺めて居るに、時折り空恐ろしくなることがあります。彼等が持つて居る智慧が、蟲にしては餘りに優れて居るに感ぜられることがあるからです。生きるには絶好な條件を與へられて居る半面に、烈しい生存競争を乗切るには、其の様な智慧が必要になつたのでせう。けれども小さい身體の中に包まれて居る小さい腦髓の中で、さうしてあの様な智慧が廻り切れるかと思ふに、いくら生存競争の結果は云へ、餘りにも早熟に過ぎるのではないかと思へさせられます。陸の昆蟲共は、好きになれるには餘りに生活が現實すぎて、時には彼等の智慧が吾々の意表に出て、吾々の生活をすら脅して居るのではないかと思はれることがあります。

それに比べると、水に棲む昆蟲にはそれ程の智慧者はなささうです。元來水は昆蟲の棲む場所ではありません。空氣を呼吸する昆蟲が、棲み場を水に求めるに云ふ事は、何かよく／＼の事情がなくてはなりません。ですから進化論者は彼等を指して、生存競争の逃避者だに云ひます。時には劣敗者だにも罵ります。小さい身體で、身分不相應な烈しい競争裡に摩擦されて、過ぎた智慧者なるを良しとするか、逃避して一先づ雲烟を過眼視するを良しとするかは決定に困難な問題でせう。然し逃避した生活には、半面には不便が伴つて居る代りに、他の半面には生活の餘裕がありさうです。水棲昆蟲

が水の中に逃避して、先づ第一に呼吸問題で無理をして居ます。元來空氣呼吸のために考案された昆蟲の呼吸器(氣管)が、水に入つたから云つて直ぐに魚の鰓の様に水中から酸素を取る譯にはゆきません。ですから「げんごろう」でも「がむし」でも水中へ潜る時には、潜水夫の様に空氣を携帶してゆきます。携帶空氣が悪くなるこゝ、嫌でも水面へ昇つて來なくてはなりません。此の様な生活は随分窮屈で、餘り天下晴れての生活さは思はれません。其の代りに、彼等の棲み場は廣々として居ます。敵も少ない様ですから割合に安樂でせう。吾々が水棲昆蟲が好きだ云ふのは、然し決して此の逃避生活を羨むがために云つて居る譯ではありません。少なくともマリさんはその様な質の人ではありませんでした。

## 二

五月も過ぎて六月にもなるこゝ、廣々した水の中の生活がいさゝか戀しくなつて來ます。二匹三匹せつかに遊いで居た「みづすまし」が、段々數を殖して來ます。長い冬の眠りから覺めた彼等も、今を生活の最盛期と心得て居るのでせう。研究室のマリさんも愈々急がしくなつて來ました。マリさんは水棲昆蟲に就ての話を澤山持つて居ますから、私もマリさんの研究室へ入つて、其の話を聞いて、蟲共の生活に眼をやる事が日課となつて來ました。ところがマリさんの話の中には、いつも「みづすまし」の話が抜けて居ます。私も「みづすまし」の生立ちに就ては、要領を得ない事が多いのです。實際マイアル水棲昆蟲誌を開いて見ても、あのせつかちな蟲の生立ち記に就ては、ものゝ半頁も書いてはありません。「みづすまし」は、其の生立ちの途中で、巧に姿を消すので、餘り人の眼には觸れないのだと書いてあります。いくら「みづすまし」がせつかちでも、甲蟲には違ひないので、卵から幼蟲になり、蛹になつてから「すすいすすいさみづのうへ、およいでわをかく」繪本に書いてある、あの「みづすまし」になるに違ひありません。途中で姿を消す云ふのは恐らく幼蟲から蛹になる時のこととせう。さう思ふに、「みづすまし」の蛹などは一體どこに居るのか見當もつきません。

マリさんもこれには當惑して居るらしいのです。そこで急に「みつすまし」探究云云ふ事に話が決まりました。

### 三

「みつすまし」には、單に「みつすまし」ミと呼ばれて居るのミ、其よりは形が稍々大きくて「おほみつすまし」ミ名付けられて居るのミがあります。兩方共、五月中旬頃から盛に卵を産み始めまして、これが夏迄続く様です。卵は白くて、小さくて、長さが二耗位の橢圓體です。池等に浮かんで居る水草の表面に、「みつすまし」の方は稍々不規則に、「おほみつすまし」の方は縦に一系列に産付けて居ます。ミミも夜中に産むものミ見えて、産んで居る所を見ミミけた事がありません。此の卵は早くて一週間位で、中から幼蟲が孵化して出て來ます。産れ出た幼蟲は四耗位の長さで、親ミは似ても似つかない恰好をして居ます。體は長くて節があり、色は親の様に黒くなく、全體が淡黄色で、美しい赤褐色や紫色の模様があります。感じは半透明です。不思議にも幼蟲は水の中で呼吸の出來る鰓を持つて居て、それが腹部の兩側にふさ／＼ミ羽の様に生えて居ます。親が呼吸問題で苦勞をして居るのに、子供はちやん／＼此の問題を解決して居る所を見るミ、移民の親子を見る様です。

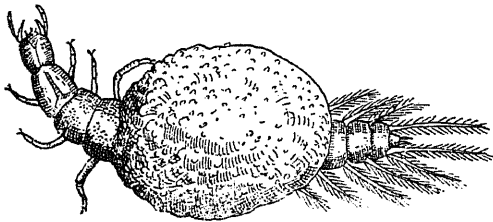
孵化したての幼蟲でも明瞭に判りますが、「みつすまし」ミ「おほみつすまし」の幼蟲ミではだん／＼大きくなるにつれて相違が益々明瞭になつて來ます。「おほみつすまし」の方では長い割に細く、「みつすまし」では短い割に太いのです。愈々老熟したミ思はれるもので、「おほみつすまし」の幼蟲は長さが二糶、幅が二耗位、「みつすまし」では長さが一糶少しで、幅が二耗半程もあります。水の中で、波の様に體をのた打たせて遊び廻る所は、親程にせつ／＼かな感じは與へませんが、餘り可愛いものではありません。幼蟲供は何を食べてるものか判つきりませんが、「い／＼ミ／＼」を與へて置いたら大きくなりました。水の中に居る小さい動物が好きなのでせう。



幼蟲が大きくなるにつれて、愈々姿を晦される時が近づいて來た譯です。マリさんも私もいさゝか緊張して警戒陣を張つた譯です。一體彼等は何をしでかすのか豫想がつきません。

ところが六月中旬頃、頂度産れ出て三週間位の幼蟲が、しきりに體をのた打たせて水から這ひ上つて來ます。確に「みづまし」の方の幼蟲に違ひありません。私共は愈々彼等の逃晦期が來たこばかり、蟲の行動を注視して居ますが、別に逃晦者とも思へない様な落著きで、蟲は悠々ミ土の上へ上つて來ました。やがて口ミ前肢ミで、しきりに泥をさぐつて居るかと思つて居る内に、小さな泥の塊を喰へ、ぐつミ身體を反らしたミ見る間に、泥を脊中へ載せます。何の意味だか少しも判りません。見てる間に何度も何度もこんな事を繰り返して居る内に、背中の泥はだんぐり大きくなつて、直徑が半握もある塊になりました。泥を背負つた姿は柴を茹つて歸る人の様です。

私達は、此の蟲はてつきり此の泥の塊の中に姿を消すものミ判断しましたが、驚いた事には、蟲は泥を背中に背負つたまゝ又もや靜かに這ひ出します。一體どこで姿を晦すのか氣が氣でなりません。蟲は靜かに這つて草へのぼり始めました。葉の蔭あたりを連りに物色して居る様子です。頂度此の時、私は他の用のために現場を去らなくてはなりませんでしたが、一人残つたマリさんは、必度「みづまし」に姿を晦されてしまうのではないかと思ふご残念でなりません。



泥を背負つた這う「みづまし」の幼蟲

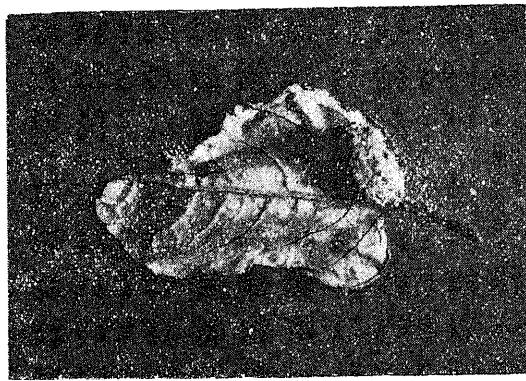
次の日、出来るだけ早く昨日の現場をのぞいて見ました。不思議な事に、乾いた泥の塊が葉蔭に著いた儘になつて居ま

す。蟲の姿は見當りませんが、さうも此の泥の中に入つて居る様子です。マリさんは、蟲が繭を造つて、中へ入つたを報告するのですが、私には解せません。マリさんは其の後の経過がさうなつたか想像しろと云ひます。いくつかの可能な方法を想像して、「みづすまし」の智慧を凌ぐ事に努めて見ましたが、私の解答は全部通過しませんでした。マリさんは一應私に経過を話してくれましたが、頂度他の一匹が前日の様な事を始めたので、其の様子を必ず見て行けと云ひます。なる程マリさんの説明の通りです。葉蔭に這ひ上つた蟲は、一寸停止しますと、やがて急に體を蛇動させて、背中の泥から抜けて前の方へ出て來ます。泥の塊は葉に附著した儘になつて居ます。今まで背中に著いて居たのに、さうしてそんなに體から離れるのか判りません。抜け出した蟲は再び泥の方へ歸つて來ました。そして頂上あたりを目ざして穴を開け始めます。その穴から頭を押し込んで、體を螺旋狀に巻きながら、くるつくるつミ泥の中へ潛つてゆきます。殆ど體が見えなくなつた頃に、穴の所へ頭が出て來ました。穴の縁をしきりに口でつついて居るかと思ふ内に、穴が段々塞つて來ます。やがて穴が塞つて、蟲の體が全く泥の中へかくれて了ふと、吾々は急に蟲に逃げられた様な氣がし始めました。暫らくの間泥の中でもぐぐ動くのが見えます。その度に泥の塊は繭の形らしくなりました。蟲が水の中から上つて來てから、かれこれ二三時間も経つたでせう。泥の中へ入つた蟲はだんぐ動かなくなりました。泥の表も幾分滑かになつた様です。これで前の日に造つたミ云ふ泥の繭もそつくりな物が出來上りましたが、吾々は泥の壁をそつミ破つて、中が見たくて堪りません。

## 五

「みづすまし」の幼蟲で興奮して居る間に、こんどは「おほみづすまし」の幼蟲が又同じ様に土の上へ上つて來ました。「みづすまし」も同じ手で人を驚かすことだらうとたかをくくつて居るミ、何んだか様子が少し變です。のた打つて上つて來た

幼蟲は、別に泥を取るでもなくずん／＼と草の方へ這つて行きます。そんなことをしたら、「みづすまし」の様な繭が造れないぢやないか。教へてやりたい様な氣になつて居るに、蟲は悠々々々草を上つてゆきます。そして地面にすれ／＼になつ



繭泥の「しすづみほお」

て居る葉の裏へ廻りました。ひつこしたら、水溫が高くなりすぎたために水から逃げだしたのではないか。心配して居ます。蟲は急に胸の當りを葉から垂れ下げて、頂度下にある泥をつまみ出しました。泥の小塊をつまむ度に、それを體の兩側へ積み上げて行きます。泥は頂度火藥庫の周りにある土手の様な形になつて葉の裏にくつついて居ます。泥がしきりに運ばれるに、土手はだん／＼高くなりました。土手の形は橢圓形で、長さが一握餘、幅が一握足らずあります。土手の高さが三握程になつたら、蟲は泥を取る事を止めました。そしてこんどは泥の圍ひの中で、頻りに泥の頂きをつまんで居ます。だん／＼堤が高くなつて、天井が出来さうになりました。時々圍の外へ出て来る事もあります。天井へひつつける泥を底の方から持つて來たり、天井の縁を伸して見たりする内に、蟲の體は泥の中へだん／＼かくされ

て來ました。斯の程度になると、前の「みづすまし」の造つた土繭も何等變りがありません。「みづすまし」に教へられた巧妙な技術を、「おほみづすまし」に教へ返へさうとした吾々は、又々「おほみづすまし」に虚をつかれた形です。

## 六

「みづすまし」にしても「おほみづすまし」にしても、今造つて入つた泥の塊は繭に違ひありません。切角繭も云ふ大切な

器官を與へられて、本當の水棲生活に入つた此等の幼蟲が、成長して親となるためには、此の大切な鰓器官を捨て、再び空氣呼吸へ還らねばなりません。考へて見るにさきけない事です。新しい環境に入つて、新しい環境に適應するのは子供ばかりです。然し其の子供の中にも、將來成長するにつれて、新しい環境に反逆する素質が入つて居るかと思ふに尙更なさけなさが増して來ます。

幾つか造られた繭の中を、吾々は先刻から覗いて見たかつたのでした。土繭の中の幼蟲は一體何をして居るのでせう。幾つか開いて見た中には、未だ幼蟲の姿で寝て居たのもありましたが、幾つかの中には美しい卵色をした蛹が見つかりました。大體繭に入つて三日目には蛹になるらしいのです。じつとして空氣呼吸をする蛹が、こんな泥の繭の中に入つて、葉蔭の目立たぬ所に置れる事は、よく考へたものです。

吾々は土繭の中で、兎に角美しい臙細工の様な蛹を見ごける事が出來て、ほつき一呼吸イキ入れる事が出來ました。水棲昆蟲の生活は逃避者の生活だ等と思ひ込んで、「みづすまし」を軽く扱つたのが最初からの不覺でした。彼等も矢張り相應の智慧を持つて、相應な戦をして居るを見えます。

後記——蛹は一週間程して成蟲になります。成蟲は土繭を破つて出て來るま直ぐに水の方へ向つて歩いて行つて、普通に見る「みづすまし」の様に遊び廻ります。(一三・五・二五)

# 變つた性質の幼児について

及 川 ふ み

一六

新入園児が家庭から一躍幼稚園に集つて、團體生活をする事になるが、この團體生活に何等の苦痛を感じることもなく入園の當初より幼稚園の生活が楽しく出来るものと、これに反對に團體生活が圓滑にゆかないものとがある。

もつとも幼児本體の幼稚園であるから新入の幼児たちも容易にこの集團生活に入るのが大多数であつて、そうでないものはごく少人数である。この一組三十人位の幼児の中に、數人の特別の幼児、即ち他の幼児たちとよく遊べない幼児は、その人自身も誠に氣の毒な幼児であると共に我々保姆にもつても亦誠に骨の折れる幼児である。

かつて自分の學生生活のおはりの頃に生徒監室の見習勤務の様な事をした事がある。その時に寄宿舎生の世話を手傳つて、はじめて先生として生徒を観る事を味つた事であるが目立たない生徒が結局一番よい生徒であるといふ事を先生からきかせられたがこの目立たない生徒は即ち皆よく調和のされた生活が出来てゐる人の事であるやうである。この點今も昔も少しもかはりがない。集團生活が圓滑に出来るものは自分自身は勿論、まわりの人も誠に幸福なこゝである。受持つた幼児たちの性質なごもだん／＼時日が重なるほご最初の印象ほご強くひゞかないものであるから新入の當時に、目立つたその幼児の特異點を矯正する事につまめたいものである。

ごく平凡な事であるが變つた幼児を數へ上げて見るに

一、お友達と一緒に遊べないもの

一、一人遊びして友達と遊ばないもの

一、附添をはなさない幼児

一、お友達のおせつかいばかりするもの

一、おこりぼくて亂暴するもの

一、のろく／＼してゐて人のする二倍三倍の時間のかゝるもの

一、おちつきがなくて、次から次へ／＼うつり氣するもの

一、自分一人で勝手な／＼ばかりしてゐるもの

右のうち一つの點だけのものもあれば、又一人で二つも三つものやな缺點をもつてゐるものもある。

こんな幼児たちは大抵の場合においてその子が神経質の幼児である事が多い。つまり神経質の子供は大抵の場合に共同生活の上に變つた幼児としてあらはれて來る事が多いのである。

神経質といふ事は大體かるい程度で、調和的の精神能力の障害に基づく異常である。普通幼稚園にこられる様な程度の神経質といふのは、その障害が感情や智能に著しい障害を起して判断や推理を誤らない程度のものである。

神経質の原因について考へて見るに、外的の原因と、内的の原因とがある様である。内的原因の場合はたゞへば、生れる前に原因があつて生れた時から子供が神経質であることである。外的の原因といふのは悪い習慣にも／＼ついて子供が神経質になる事である。

この前者の方はその原因が原因であるだけにその道の専門でいろ／＼研究されることであるが、後者の外的原因については我々は注意して出来るだけその原因をのぞく事につとめなければならぬ事である。

悪い習慣によつて子供が神経質になる場合の事を一寸考へて見るこゝ

一、故意に放任して、子供がしたい放題に委せておく事　つまり我儘がこうじて神経質になる。

二、第一こゝ反對に一々子供のする事に干渉する

三、御機嫌を害じまいこゝ溺愛するもの

四、親の心配がすぎて神経質に世話をしたりいたはつたりするもの

五、親の機嫌で子供を可愛がつたり吐つたりするもの

こんなこゝが原因で神経質な子供に育てる事になる事も多い様である。

そこで受持つた幼児中、他の幼児こゝこゝなつて、皆こよく遊べなかつたり、おこりばかつたり、よく泣いたり、おちつきがなかつたりする様な幼児たちを見出した時にその變つた性質になつた原因をいろいろ考究して見る事である。

先づその幼児の健康状態について、

次にその幼児の家庭の状況について

考へて見るのであるが家庭の状況については

両親が神経質であるか、或は両親のうちいづれか一方が相當の神経質でないかこゝいふ事

家族の誰かゝ神経質でないか

兄弟姉妹の數やその性質

一人子でないか　末つ子か

附添の女中なごに特に神経質のものがるないか

なまぐさ考へてその環境より受ける神経質的原因を考慮しなくてはならない。

次に常人の健康について

偏食の悪習があるのではないか

睡眠の様子はどんなものであるか

身體のごこかに病氣をもつてゐないか

なまぐさ云ふ事について考へて見るのである。

このうち偏食の悪習をもつてゐるものが比較的が多いやうであるが、偏食即ち食物にすぎらひの甚しい事で、これは性來の神経質にもよるものであるが、大人がきらひである爲に子供にもたべさせないで、これはまづいさ豫感を與へてしまふものも多いのである。つまりたべすぎらひにする事である。これなまぐさは誠に子供に對して申しわけのない事である。

間食を少くしてこの偏食の癖を矯正する事も出来る。間食が多すぎるさ食事の時も空腹にならないで、何をたべても大しておいしいとは思はない。自然すぎなもの、おいしいものもなくなるのである。きらひなものゝかはりに他の食物を與へない事につまめる事が大切であつて、この點大人でも子供でも少しもかはりない事である。軍隊生活や、寄宿舎生活を少しながく續けたものには偏食の悪習が直る事である。

次に睡眠であるが夜は出来るだけ早くねる事。

出来るだけ戸外の運動を多くして身體の疲勞によつて自然の睡眠をさる事。

又安眠の出来る様に幼児の睡眠する周圍を靜かにする事

この他いろいろ家庭や幼稚園なまぐさにも複雑した理由もある事も、多々ある事であるけれども特別な性質の幼児である様



に觀察した場合には、そのよつてきたるまゝの原因をよく調べ幼稚園にその原因がないか、或は家庭の方にもないか、健康の點、家族の様子、通園中の出來事、その他のことについても細心の注意をもつて調べて直接注意の出來る事は保母自らその矯正の方法を講じ、家庭へ協力を望む事はその母親たちとよく相談の上で適當の方法をまゝりたものである。

要するに神經質の幼兒はつまり外からの刺戟に對して、抵抗力が弱いといふ事に歸着するのであるから出來るだけその弱い神經を刺戟する原因をまゝりのぞくまゝ同時に、これに抵抗する力を除く様に養つてゆかなくてはならない。

尙その矯正の方法としては環境の變化にしても、或は悪習を矯正するにしても、その方法は徐々にしてゆかなくてはならない。急激な變化はかへつてやり損ふ事が多いものである。

具體的にいろいろ變つた幼兒の實例を擧げて述べてみたいと考へたがそれは又の機會にのこしておく事にする。

たゞ自分たちが日頃一緒に遊んでゐる幼兒たちは多數志願者のうちから選ばれた幼兒で、變つた性質の幼兒といつてもその程度が又自然こゝになつてゐる事と考へられる。

# 齒と食物

東京高等齒科醫學校 湯 淺 泰 仁

強い丈夫な齒を作るには、食物に注意を拂ふことが最も大切である。従つて兩者の關係に就て、是非心得て置き度いことを御話するここにする。吾人の取る多くの食物を極く大別すれば、蛋白質、脂肪、含水炭素と云ふ要素以外にビタミンや鹽類などの重要素がある。之が最も齒の發育に關係あることを忘れてはならない。扱て齒の發生は妊娠後二ヶ月頃より始めて、其が段々發育して石灰鹽が沈著し、後初めてあの様な硬い齒が出来上るのである。之を(包)灰化と稱し、乳齒では胎生第四ヶ月から生後滿二ヶ年位で終り、永久齒では胎生第七ヶ月から生後滿十七八歳頃まで懸るものである。故に齒性の良い齒、即ち充分な石灰化を得ようとするには、胎兒が母體中にある時から母親の飲食物に注意を拂ふことが必要である。随つて不健全なる母體より生れる子供は、多く不完全なる齒を生ずるものである。斯る障害は全身病にも見らるゝ所謂「素因」に申されるもので、或程度まで相當確實な症例が、擧げられて居る。又一度齒が出てしまつた後成人の齒は其中に含まれて居る石灰鹽が少しも増減しないものか、さうかき云ふことは肝心な事柄である。此點を大體御話して見るに、先づ一度完成して了つた齒の硬い組織も常に物質が代り合つて居る。即ち物質代謝が行はれてをる。そこで石灰鹽類の沈著は成人になつても行はれるもので、榮養をよくするに齒も亦其れに従つて良くなり得るものも信じられる。斯様にして胎生期は勿論、幼少年期から青年期に至るまでも、常に食物榮養を云ふことが齒質を良くする上に大切である。齒の構造の内硬い組織としては珪瑯質、象牙質、白聖質の三部に區別されるが、珪瑯質は約九六%—九八%、象牙質は約

七二%、白聖質は約六五%の無機質を含んで居る。そして此の無機鹽類の内でも多いのがカルシウムで、次は磷酸鹽とマグネシウム等である。此様に多量の鹽類は體の他の部分から血管を通じて運ばれるもので、随つて齒の形成されて居る時期は之に適當なる榮養攝取が必要な理である。尙ほ或學者は飲料水のカルシウム含有量と齒の關係を検べ、カルシウムを多く含む水を飲んで居る地方の人は、灰化度の強い齒を生やす爲、齶蝕にかゝり悪いと迄云つて居る。然し人體には大變機微な作用のあるものであるから、いきなり以上のものを過剰に攝取したからと云ふて良いものではないが兎に角、無機鹽類を多く食べる必要のあることは明かである。妊娠時の榮養は前述の如く母體の爲にも胎兒の爲にも大切であるが殊に四、五ヶ月頃には「つはり」を稱して、榮養が取れず偏食に陥る者が少くない。斯る場合こそ最も危険な影響を及すものなれば注意して片寄つた食物を取らぬ様心掛く可きである。尙ほこの偏食に依る體質の變化は幼兒及成人にも大切な事柄であると思ふ。ビタミンは近來大變重要されて來たが特にカルシウムとの間に密接の關係があつて、食物攝取上兩者の充分なる存在を必要とするものである。ビタミンには色々種類があるが其中ビタミンCとDとが齒や顎の發育に關係が深いもので、此等の缺乏を來す著明な變化を齒や骨に惹き起すことは既に證明されてをる。即ちビタミンC缺乏症は齒質の灰化が悪くなり、殊に珪瑯質に多く變化が起ることを云はれてをる。又ビタミンD缺乏症は即ち佝僂病を惹き起すもので、顎骨は吸収されて齒が次第に緩んで動搖する様になり、齒齦から出血もする。然し食物中に前記の榮養を含むものを與へるを再び治つて來るものである。

次に最近ホルモンに就て色々話しが出るが齒に關しては授乳期の頃は最も關係あるものにて、母乳に比し牛乳の如きものは大切なホルモンを比較的缺乏する次第なれば、斯る時期に於ける人工榮養は大いに注意しなければならぬ。以上は大體の所を綜合した常識的心得に過ぎないが、機會を得て常食品に就き詳しく述べ度いと思ふ。

## 第二回フレールベル賞審査發表表 (幼兒童話)

豫て募集中の創作幼兒童話に對し多數の應募作品を寄せられ、いづれも熱心なる御好意に對し感謝に堪えません。前に發表して置きました通り、小川未明、岸邊福雄、倉橋惣三、久留島武彦、新庄よしこの五氏の嚴密なる審査の結果、豫告規定通り一、二、三各等各一篇を選外佳作十二篇を決定しました。その作品は順次本誌上に掲載します。尙ほ當選諸氏に對しては、規定通り、株式會社フレールベル館創業三十周年記念寄贈保育研究資金による賞品を贈呈いたします。猶本誌に入選作を發表して下さいます。

一 等      さいとうばらひ      神奈川縣大磯町幼稚園      K      S

二 等      春が來た      東京女子高等師範學校附屬幼稚園      杉山よね

三 等      ニコくダルマさん      栃木縣女子師範學校附屬幼稚園      佐藤久子

# 選外佳作

- 一 河童の瓶
- 二 でんく蟲のお話
- 三 狸とお園子
- 四 雪のトンネル
- 五 粘土のよろこび
- 六 公園の椿
- 七 貞夫ちゃんとお太鼓
- 八 かくれんぼ
- 九 南京城
- 一〇 寛さんご蟹
- 十一 蝶々の蜜採り
- 十二 不思議な玉

昭和十三年六月

- 静岡縣賀茂郡町立下田幼稚園 田中まり子
- 福井縣鯖江幼稚園 山本ゆき子
- 福井縣若松市若松第一幼稚園 石堂トヨ子
- 福井縣三國町橋本月の輪幼稚園 桂本美枝子
- 佐世保市比良幼稚園 小塩れい子
- 兵庫縣安栗郡山崎町立幼稚園 藤子
- 福島縣二本松町立幼稚園 眞木喜久子
- 三重縣上野町立第一幼稚園 N子
- 朝鮮仁川府旭町旭幼稚園 直野カツ
- 島根縣女子師範學校附屬幼稚園 佃孝
- 岡山市立御野幼稚園 石原三重
- 新潟縣新發田上鐵砲町 三浦秀

# 第三回フレーベル賞 幼児童話審査に就て 審査員諸氏の御意見御感想

## 選後の感想

小川 未明

多くの作品を読んで、私の先づ感じたことは、やはり古いお伽噺風のものゝ多いといふことでした。たゞへ形式は古くても、その作品に新鮮味があり、また美しさがあれば、別でありますけれど、さうでなくして、その内に含まれた比喩も、寓意も、或は教訓も、有ふれたものであり、浅いものであれば、是等の作品には、魅力がないといふ譯であります。

さうした作品も、口演さるゝ場合には、或は面白く子供

達にきかれるかも知れない。しかし、それは語る人の技術によるのであつて、その作品が持つ、文學的價值ではないのであります。

こゝでは、何よりも作品が、文學でなければならぬことです。

△

次に、半ば現實的であつて、半ば空想的な、ちやうど木に竹をついだやうな作品の多いことでした。童話は、も

より單なる記述であつてはならぬのであるから、空想を入れるのは作者の自由だけれび、お話を構成する上に、渾然純化されなければならぬものです。

しかるに、作者の意圖が、子供の實生活を取扱ふにあつたものゝ、觀察と想像力の不足から、中途より、漫然たる空想の易き世界へ逃れたのが、かゝる結果となつたのであります。

言ひ換へれば、作品として、不熟であり、未完成のものでした。

## △

殘る作品は、兎に角、現實を基礎とした、空想の世界に取材せるものです。即ち子供の動作を觀察して、特異な生活を認識し、愛情をもつて、彼等に同化し、子供の眼をもつて見、子供の心をもつて感じたのが、此種の作品であります。

そこには、その見方に、感じ方に、浅い深い之差があります。そして、その浅いものは、たゞ子供の心持が素直に書けてゐるさういふ程度に止るものであり、未だ、多彩にし

て、曲折なるお話を作るに至つてゐません。

新しい童話として、理想とするところは、子供の眼をもつて見、子供の心をもつて感じ、更に深く、強く、自然に働きかけることです。しかる時に、はじめて、いろいろの美と不思議を掴むものです。子供の空想程、自然に即して、豊かなるものはない。子供は、全く夢と現實の間を自在に出没し、また生活するこゝを得るものです。故に、童話作家は、また自から純情にして、この境地にまで到達しなければならぬ。眞に作家が、子供等と生活する時に、よく、彼等を反省せしめ、彼等の性情をして、自然的なる伸展をなさしめるこゝを得るのであります。斯の如き、科學的背景を有する空想にして、はじめて藝術的價値を生ずるのであります。

古いお伽噺にあつては、子供の内部に立入るさういふやうな謙虚と純朴さがなかつた。従つて、現實から、夢を生み出すこゝが出来なかつた。強制を教育したる見地から、皮相的な意義しかない童話も、目的のために役立てやうしました。そして、子供をこれに引きつけんとして、荒唐

無稽な非科學的な話も意さしなかつたのであります。

△

文學たるには、何よりも空想の普遍性も自然なるを崇びます。そして味ひの深いもの、眞に内心よりの感化に役立つものであります。將來の童話は、その人々藝術の力によつて、新しい善惡の夢を現實に創造するにありますが、その作品は、人間性の涵養に力むるは勿論であるが、また、一

## 忠實なる作品を歡ぶ

×

第二回の此の懸賞童話には、『子供の生活に即した地方色のあるもの』と言ふ條件が附けてあります爲に、投稿者には、随分苦勞された事を察します。

實際は、註文が、あまりに慾張つてゐたかも知れませんが、先づ地方色の豊かなもの、次に子供の生活に即したものと云ふ工合に、二つに分けて、どちらでもいいから、其

面に昔のお伽噺の持つ面白味を失つてはならぬのであります。

今度の應募作品の選をするに當つて、私は、子供の生活を觀察して空想の豊かであつたものを第一とし、次に、子供の心持が比較的よく書いてゐるたものを第二とし、そして、第三には、村の年中行事を見るやうに取扱つてゐるものを主として見た。(をはり)

岸 邊 福 雄

註文にはまつたものを歡迎するようにして、投稿を募つたら、もつと樂に應募されたかも知れません。

×

私は入念に審査しました。三日かかつて二三回宛通讀しました。いづれも投稿者が忠實に創作されてゐる成績のあり／＼を見えました事は、何より嬉しかつたのであります。一篇毎に批評を加へます事も、煩雜でありますから、一



二について申し上げます。一等の『さいごうばらひ』は地方  
地方に於ける年中行事で、可なり年代を累ねてゐるもので  
ありますが、それを今日の童話として取り扱はれたのは嬉  
しかつた。

地方色もあり、子供の生活にも即してゐて、全く希望通  
りであります上に、文章もなめらかであります等々、審査  
員諸員の大満足された所でありました。

×

『ニコく〜ダルマさん』は、悪戯が一つのクラキマックス

## 苦言

遠慮なく——御懇意づくで——申し上げる。皆さんのお  
作を読んでゐて、なか〜うまいものだと思ふ。地方色ミ  
いひ、児童生活ミいひ、随分面倒な條件が附いてゐるの  
に。忙しい日々の保育の間に、よく之れだけの創作が出來  
るものだと思ふ。

になつてゐますのは、玉に瑕でありませう。『でん〜蟲』  
は、幼児らしい教訓譚。『河童の瓶』は、多分傳説を資料と  
されたのでありませうが、これも地方色のある面白い話。  
『狸ごお園子』は、此種の譚は、動くもするも、野卑に陥る  
る恐れがありますが、此の作は其點に深き注意を拂つてゐ  
られるのが嬉しい。

妄評多罪、もう斯様な無遠慮の老人を審査員なんかにな  
さらない好いです。ハイハイ (二三、五、一九)

## 倉橋惣三

しかも亦、尙ほ遠慮なく申せば、折角の材料を着想ミ  
に、もう少し、力を入れた取り扱ひの出來ないものかご。  
なんだか書き流しのまゝで、読み直しも、加筆もしてない  
のではないかごさへ思はれる。つまり、材料がよく、着想  
もいゝのに、表現上の苦心が足りないのではないかごいふ

のである。

此の懸賞募集を特に保姆諸君に限つてゐるのは、言ひかへれば、童話作家としてのくろ、う、ごの諸先生でなく、そのくろ、う、ごでないさいふ意味でのしろ、う、ごの作を求めてゐる譯である。ですから、しろ、う、ごらしいところこそ、求むるところがあるともいへる。しかし、いくら、くろ、う、ごで

## 選者の一人として

今度の募集でみなさんから寄せて送られた童話はなかなか澤山にあつて、一くるみに束ねた原稿がドサリと重く手應へのあつたのもまことに頼母しい氣がした。

それに、今迄のものに比べて、条件がついてゐるので、これが作者側から云へば難しいと思つて苦にする人もあらうし、又、その方が却つて作り易いと思つた人もあらう。とにかく、すつかり眼を通して見たところでは、これもこれも條件に適つてゐるものばかりで、而かもその条件の性

ないからして、作をする以上、少しは表現上の苦心がなくしてはなるまい。それがさうも足りなくないか。

さいふのは、皆さんに失禮なおこしを申すのではない。たゞ、如何にも惜しいと思ふからである。惜しくてならないからである。勿論、表現だけ巧みな似而非く、う、ご作は尙困るが。

## 新庄よしこ

質上、地方にいくものが多かつたさいふのは止むを得ない結果である。殊に朝鮮や満洲から應募されたのには、時節柄事變色のはつきりしたものが多かつた。内地に居て、ニュースで戦況を知るさいふ間さほの状態よりも、出征さか、傷病兵の選送さかが、それが話して傳へられるより、眼の前の事實として幼児の生活に即してゐるから、話の内容には迫つてくる切實なものが二三あつた。たゞ惜しい事に、描寫が粗雑であつたり、童話としての要素が含まれてゐな

かつたりして、それらが高位に置かれなかつた事をまことに残念に思つてゐるが、そんなのを讀みながら、こんな話には是非さりあげて、かういふ時に出あつた幼児達へは話しておきたい内容であつたことを返すべくも惜しく思つてゐる。

「ちいさうばらひ」は、さすがにこの點から見てもよく出来てゐる。但し大人ごのみこいつた感が多少勝ち過ぎてはゐるまいか。

地方色を云つても、その地方に用ひられてゐるのでその意義もあり、全然關係の無いところではそれ程生きて來ないこゝろの特種のみ、ここに持つて行つてもその地方色が子供のこゝろへ溶けこんでゆく普遍性のみがある。「さいこゝうばらひ」は、それを行つてゐる地方ではまことに申分なくあつかはれ、事實を結び合つて子供へちかになつてゆくゆかれるが、多少範圍のせまい氣がしないでもない。いろ／＼の條件をすつかり具へてはゐるが、他國の幼児がきいてゐてまでこれだけ喜んで聞いてくれるかを考へるこゝろ

豫想がつかない。むしろ選外の中にそうした普遍性地方色をあつかつたものが多かつたと思ふ。但し、強いて難をさがしただけの事で、是非高位に置かれるべき童話といふことはいふ迄もない。

『春が來た』といふのは、題材がかなり抽象的で、こゝろふのは童話に作り難く、さかく避けられがちのものであるのに、うまく子供の生活を織り込めてあるのが上乘。こまやかな筆の運びが、丁度春の風が頬をなで、ゆくようなやわらかさであつた。

『ニコく、ダルマさん』これは最も子供が喜んで聞きそうな童話、聞いてゐるながらダルマさんの様子や店のありさまなごが幼児の心にも浮んで來そうに思へる。言葉づかひなごに、もう少し氣をつけてあつたら、地方色なごの點が幾分薄いとしてもよい童話になれるであらうと作者の爲に惜しい氣がした。

何をするにしてもまづ、ヅラリと竝んだ幼い顔と動作とが眼に浮んで來てしまふ。それで、童話を讀んでみても、

この所で斯う話せばきつゝ喜んで聞いてゐるであらうか、これはどうも聞きこなしで貰へそうも無いミかを、子供の顔に結びつけて考へてしまふ。事實談や観察ばなしは別として、随分いゝ話だと思つても、その一篇のどこにも一寸指先を觸れただけでバツミ動き出すバネ仕掛のない作品は、幼児童話には向かないように思ふ、もつとも話し手が上手ならば、方々に自分でその仕掛を作つてゆくけわで

あらうが、それは又話術の方の研究に譲るゝして、ただ讀んだだけで、どこかにそれを持つてゐるさいつたのをなるべく選んでおいた。

選ぶ以上は兎にも角にも、いろくゝの立場を考へて、夫々の角度から見たつもりではあるが、いまこゝに記したようなところが私の選にはおのづから勝ちはないかといふ懸念があるので、終りにそれをお断りしておきたいと思ふ。

時局柄でもあり今夏の文部省主催の幼稚園の講習は如何なる事かと、よりく話合つて居りましたところ、當局の深い御關心の下に、今年も例年の通り、例年の會場に於て開催せられる事になりました。又當協會主催の遊戯の講習も、文部省主催保育講習會の午後、これも亦いつもの會場で催す事にいたしました。文部省講習の内容も充實したものである由に聞いて居りますが、當協會の今年の遊戯の講習は自慢してもいゝかと一寸自惚れて見て居ります。講習會に就ての詳細は本誌色刷り挟み込みの廣告にて御承知下さいませ。もうすぐ、全國のお元氣な皆様方と、共に學び、共に踊るの日がまゐります。その日を楽しみに、係員は一段の緊張をもつていろく準備にとりかゝつて居ります。

(講習會係り)

# 入選童話

## 一等 さいごうばらひ

K . S

國男さんの町に、さいごうばらひ ミ云ふお祭があります。お正月のお休みが過ぎて間もない、一月十四日の晩に。

本當の名は左義長祭さぎやちようまつミ云ふのですけれど、みんな、さいごうばらひ、さいごうばらひ、ミ云つて、おだんごをさした木を焼きに行くのを、楽しみにして居ます。

國男さんは、その晩、はじめてお母様ミ、そのお祭りを見に行くことになりました。

國男さんは、幼稚園で、お園子さしをしました。小使さんが、お山から取つて来てくれた木の枝を、みんな一本づゝ頂いて、それにお園子をさすのです。木の枝は、これも國男さんのせい程長く、葉っぱのすつかりなくなつた枝が、何本もつんつん出てゐます。お園子、それはお米の粉でこしらへた、ふかしてたのまだ温いので、白いのを八つ、赤いのを六つ頂いてさすので

した。

「美味しさうだな」やはらかなお團子は、國男さんが指先でおさへるを、すつと引つこんで、そのまわりを、ちよつ、ちよつ、こつまみますと、丁度鐵かぶこの様な形になりました。

「僕の ほら 鐵かぶこだよ」「そう云つてお友達に見せますと、「いゝね、僕も拵へ様」「あ僕もだ」こ皆が眞似をして、すぐに太郎さんの枝にも、正男さんの枝にも、鐵かぶこのお團子がつきました。

それに、黄色い色紙で折つた鶴を、水色の紙風船を下げた枝はとてもきれいです。

國男さんも、お友達も、皆その枝を肩にして、鐵砲かついだ兵隊さんの様に元氣でお家へ歸りました。

お夕飯がすむと、國男さんは、もう待ち遠しくてたまりません。

「お母さん、まだ？早く行きませうよ」と、おさいそくです。

まもなく、あたゝかさうな襟巻を掛け、手袋をはめながら、お母様が、出ていらつしやいました。

外には冷たい風が吹いて、随分寒い晩です。

國男さんは、お團子の木をかついで、お母様の前を、スキップしたり、走つたり、時々くる

つみお母様の方を向いて待つてゐたりしながら、海岸の砂濱へ参りました。

もう、たくさん、人が集つてゐます。みんなお團子の木をもつて。

波打ちぎはの近くには、門松が、高く高く、山の様に積んでありました。その門松の山は、  
ずつと離れた處に又ひみつ、又ひみつ。

真くらの空にまつくろな海は、こわい様です。

ミ、急に、あちらの方に、まつかな火が燃え上るのが見え出しました。

「山王町のがもえたぞー」誰かが大きな聲で言いました。ミ又ひみつ、今度は、反對の方に、真赤な火がもえ始めました。

その時、國男さんの側を、二人の男の人が何か口早に、はなしながら驅つて行きました。

「さア、そろそろつけ、ええよ。」

「あ、」

シュツ、マッチをする音がしたと思ふミ、下側の松の枝に、火がついたらしく、バチバチ、バチ、バチあたりが明るくなって、メラメラミ、赤い火が燃え出しました。さんさん燃えま  
す。白い紙が、ハタ／＼ミ鳥の様に、飛び上りました。お隣りのよつちやんの書初めでせう  
か。

國男さんのお家の門松も、お隣りのも、おむかひのも、眞赤に燃えてゐる様子です。

何時の間にやら、大勢の人が、火のまわりを圍んで、お團子をさした長い枝を、燃えさかる火のそばに、かざしてゐます。國男さんも、持つてゐるお團子の木を、ずつと手を延ばして、火の方へ近づけました。

パチ／＼パチ／＼バーンバーン

赤いおだんごも、白いおだんごも、熱いあつい顔をしました。國男さんの拵へた鐵かぶりは、やつぱりあつさうな顔をしません。

「もう食べてもいゝかい」 國男さんが、聞きますと、一番枝の先に付いてゐるお團子が云ひました。

「さあ、はやく／＼。私は、今度ぼつちやんが、悪いお病氣にかゝらない様にして上げませう」 國男さんは、枝を引つ込めて、そのお團子を、フーフーふきながら食べました。そして又、火のそばへつき出しました。

「もういゝかい」 今度は、二番目のおだんごです。

「さあ、はやく／＼、私は今年ぼつちやんが、怪我をしない様にして上げませう」

國男さんは、フーフー又ひこつ、あついのを食べました。今度は三つ目のおだんご、「も



ういゝかい」

「さあ〜早く〜、私は今年ぼつちやんが、悪い蟲に刺されたりしない様にして上げませう」

「あゝあつい、あつい」 今度は國男さんが、まつかな顔をして云ひました。

ワッショイワッショイワッショイワッショイ 急に、ミても賑やかな聲が聞えて來ました。

見るご、大勢の漁師さん達が、まつばだかでお神樂をかついで、砂濱を、あつちへもみ、こつちへもみ、やがてザブ〜と海の中へ這入つて行くのです。眞赤に燃える火のうしろの、眞黒な海の中へ。

海から上つた漁師さんは、國男さん達の圍んでゐる門松の火に、はだかの身をあたゝめては、ねぢりはちまきをし直して、又海の中へ這入つて行くのです。

「お母さん、あの人達よく寒くありませんねえ」

「あの方達は、毎日、冷たい海の風に吹かれて強い上に、あゝして一生懸命だからですよ」

だん〜火のもえる勢が弱くなつて、門松の山が、さつさつとくづれました。國男さんのお家の門松も、おこなりのも、みんな燃えてしまつたらしいです。

これでもうお正月は、すつかり行つてしまつたのです。

「ああ、歸りませう」

國男さんは、鐵かぶこのついた杖を、又かつぎ、片手でお母様のたもこをつかまへてお家へ歸りました。なんだか少しねむくなりながら。

お耳のそばで、さつきのお園子が、

「國男さん元氣に大きくなあれ。ひさつお年をまつた國男さん丈夫になあれ。」と云つてゐる様でした。

さいとうばらひ　と云ふお祭りのおはなしは、これでおしまひです。

## 二 等 春 が 來 た

杉 山 よ ね

〃春が来たく何處に來たア〃

お庭の方からフミ子さんのお聲が聞えて來ます。ヒロシさんは

〃山に來た　里に來た　野にも來たア〃

と一緒歌ひました。

「だけれど春つて本當に何處に來たのかしら僕は未だ見た事ないけれど……」

ヒロシさんは、春さんで一體どんなお顔をして居るかしら、さか さんのお聲でお話するかしら、さか考へて見ました。其中にヒロシさんはいゝ事を考へ出しました。

（さうく春さんを探がして來やう フミ子ちゃんも一緒に！ それがいゝく）  
それでヒロシさんが大きなお聲で

「フミ子ちゃん」

と呼ぶとすぐ可愛いフミ子ちゃんが

「ナーニ？お兄様」

と云ひ乍ら來ました。

「あのねフミ子ちゃん 春さんを探がしに行かうよ」

「春さんでナーニ？」

フミ子ちゃんが不思議さうに聞きますので、ヒロシさんは先刻から考へて居た事をお話しました。するさ

「えゝ行きませう 連れて行つてね」

フミ子さんが大喜びですぐお支度をしました。大きなおいしいおむすびを澤山作つて……でも

困つた事には二人とも春さんが何處に居るかを知らないのです。

「何處に居るのかしら？」

「さうねえ」……あゝお兄様 春つてお山や野原に居るんでしょ？だつて、春が来た、のお唱  
歌に

山に來た 里に來た 野にも來たア、つて云ふんですもの」

「さうだ、きつこ野原やお山に居るね」

それで二人は喜んで出掛けました。お外は、もうせんに佩を揚げに來た時よりも、ずつこすつこ暖かでした。好い氣持です。

二人はお歌を歌ひ乍ら歩いて行きました。さうするこ向ふから可愛い駒鳥さんが飛んで來ました。

「チツ／＼／＼今日はヒロシさん フミ子さん さちらへお出掛けですか？」

「今日は、可愛い駒鳥さん 私達はね、春を探がしに行くのよ」

「フミ子さんが云ひます、駒鳥は大喜び」

「チツチツ それなら私も御一緒に連れて行つて下さい。」

お歌の上手な駒鳥さんも御一緒に、前よりも賑やかに歩いて行きました。きれいなお聲、可

愛いお歌、楽しい道を暫く歩いて行きますよ、今度は向ふからお馬さんが来ました。

お馬さんはヒロシさんごファミ子さんご駒鳥さんを見るご、クロッパくご歩いて来たのを立止つて云ひました。

「ヒ、ーンく今日は坊ちゃんお嬢さん さちらへお出掛けですか？」

ご聞きました それでヒロシさんが

「今日は、お馬さん、僕達はね、春を探がしに行くの、野原やお山に居るかも知れないから……」

さうするごお馬さんは勢込んで云ひました。

「春さんを探しにですつて？さうぞ私も連れて行つて下さい……私の足はこんなに丈夫だし、若しも坊ちゃん達がくたびれたら背中に乗せてあげる事だつて出来ますよ、さあ御一緒に参りませう」

それで又お友達がふへましたので皆大喜び 前よりも、もつこくお元氣良く歌つたりお話ししたりして、何處迄もく歩いて行きました。暫く行くご耳のあたりで、誰か優しいお聲で

「今日は坊ちゃん」

「今日はお嬢さん」

を呼ぶものがあります。

「誰？」

皆で前や後や遠くや近くや 探がしましたのに、誰も居ません

「まあごなたでせう……今本當に、今日は、つて聞えたのに……」

ミフミ子さんが云ひますミヒロシさんも

「うん、本當に誰かと呼んだ」

駒鳥もお馬も

「私も聞いたわ」

「僕も……」

皆で不思議に思つて居ますよ 今度は柔い布でホッペを撫でる様に

「私は此處に居ますよ 今お呼びしたのは私です、東風ですよ」

「ナーンだ 風さんなの だけき何處に居るのいくら探がしても僕には見えないうよ」

「私にも見えないうわ」

するよ又風さんのお聲がしました。

「え、私は皆さんのお目目には見えないうですよ、でも、ほら氣を付けていらつしやい私は

通り過ぎる時皆さんのおつむやホッペをそーつゝ撫で、通りますよ。こうして私はじーつゝ向ふから町も海もお山も通り越して旅をして来ました。澤山の坊ちやんやお嬢さん達に會ひましたよ。色んなお話しも聞きました。佩あげをして居た坊ちやんは私の事を「もつこく強く吹いて」なんて云ひました。でも私はもう春が来るのでそんなに強くは吹けないですよ。」

「えつ？春が来るつて？君春は何處に居るか知つてるの？僕は春を探して居るだけだし」「あゝ春なら向ふから……今私の通つて来た方からもうすぐ來ますよ。緑の着物を着て赤や桃色や紫や黄色の綺麗なお花飾りをつけて居ますよ。そして其のお聲はごても可愛いゝんです」

「親切に教へて呉れました。風さんに有難うござよならを云つて歩き初めました。もうすぐ春さんに會へるのです。」

「春よ來い 早く來い」歌ひ乍ら……

やがて遠くの方にボツリと黒いものが見えました。急いで歩くに、さんく其の黒いものは大きくなつて、さうく木の澤山ある森へ着きました。黒い見えたのは木だったのです。

「おや〜道を間違へたのかしら？お山にも野原にも着かないでこんな所へ來て仕舞つた。」

お馬さんが心配さうに云ひますので駒鳥さんが、一本の木にこまつて聞きました。

「チチック／＼若しく／＼森の木さん今日は、野原は何處にあるでせう?」

する／＼其のびんぐりの木はびつくりした様に云ひました。

「やあ駒鳥さん暫らくですな、野原なら此の森を通り過ぎればすぐですよ……でも駒鳥さん、さうして野原へいらつしやるのですか? 皆他の鳥さん達はぎん／＼此の森に集つていらつしやいますよ」

する／＼ヒロシさんが傍から

「僕達はね、春さんを探して居るのですよ。きつ／＼野原には居るだらうつて……」

／＼云ひます／＼びんぐりさんは

「あゝ春さんですか? それならもう此の森へすぐ來ますよ……ほら聞いてごらんさいあれが春さんをお迎へする聲です」

それで皆は靜にしてお耳にお手々を當てました。あゝ本當にチイチク／＼ピーグル／＼ポッポー／＼クルー／＼こ賑やかな事／＼いろ／＼なお聲が聞えて來ます。する／＼駒鳥さんは嬉しさうな／＼お聲をあげて

「あゝ春です／＼春さんが來たのです。私は行かなければなりませんチチック」



ミ飛んで行きました。森の奥は一層賑やかになつた様です。それでお馬さんミヒロシさんミフミ子さんはごんぐりさんにお禮を言つて出掛けました。もうそこ迄春さんが来て居るのです。嬉しくて〜ごん〜歩きました。

「何處かで雲雀が鳴いて居る」

歌ひ乍ら歩いて居るミやがて、緑の緑の深々ミ柔かさうな草の生へた所に出ました。ヒロシさんが

「あッ野原だ！」

ミ云ふミ 今度はお馬さんが

「あッ 春です〜春が来たのですおいしいおいしい春の草ですよ 春さんの何よりのお土産です」

お馬さんはもう嬉しくて〜たまらなさうに、あの大きなお鼻で綺麗な緑の草の匂ひをかいで、それからあの大きなお口でおいしさうに〜それを食べ初めました。ヒロシさんはフミコさんに

「ね、本當に之が春さんかも知れない、先刻はあんな可愛いお聲でさへつて居たし、こんなに緑のおベ〜を着て居るよ」

「云ひます」 フミコさんは

「でもお兄様、赤や紫のお花飾りは！」

「云ひ乍らあたりを見廻して居ましたが

「あッ！」

「云つて走り出しました。あつたのです。蓮華草や菫やたんぽぽや、綺麗なお花飾りが澤山あつたのです。さうくフミコさんも春さんに會ひました。次から次へさよい匂、綺麗な色、フミコさんはヒロシさんの事も忘れてお花に夢中でした。一人になつたヒロシさんは

「フミコちゃん お花澤山あるの？」

「云つて 其の方へ馳け出します、おやつ少し先の所でチカッ光るものが見えます

何でせう……急いで其の方へ行つて見ました。お水の綺麗な小川がルンルン流れて居ます

「やあ、川だ」

ヒロシさんが大きな聲を上げた時

「今日はヒロシさん」

「今日は坊ちゃん 春が來ましたね」

まあく可愛いめだかさんの行列です 後からく透るやうな淡い橙々色のお體で ツイく

こお水の中をすべつて來ます

「やあめだかさん今日は、今日は、春が來た春が來た、本當に春が來たのね」

ヒロシさんもすつかり嬉しくなりました。そこへ眞黒なツルクしたお體のおたまじやくしもチヨロリくく來ました。

〃春が來た 春が來た 何處に來た〃

山に來た 里に來た 野にも來た〃

お馬さんもヒロシさんもフミコさんも、嬉しくてくく大聲で歌ひました。だつてさうく春さんに逢へたのですもの、縁のおべとにめだかやおたまじやくしの模様のある川の帶をしめて赤や黄や紫の美しいお花飾りをつけて綺麗なお聲の春さんに……

もう春はごこにでも來て居たのです。

### 三 等 ニコくダルマさん

佐藤 久子

人ごぼりの、にぎやかな街にね、眞赤なお店が一軒ありました。

まつかなお店？

眞赤なお店つて一體なんでせう、眞赤なものを賣つてゐるお家なのよ、

まつかなもの？

それはね、ダルマさんなの、大きなダルマさん、小さなダルマさん、たくさん／＼のダルマさん、みんな赤い着物を着てお店の棚につらり／＼ならんでゐるでせう。

だから街を歩いて来るミダルマ屋さんのお店は、ミつても眞赤に見えるのよ。

そしてね、そのダルマ屋さんのお店にはやつぱりまつかなお顔をしたおぢさんがチョココンミお坐りしてお店ばんをしてゐらつしやるのよ、ぢや、おぢさんまでダルマさんミまちがへられないかしらつて？

うゝん、大丈夫!! 後の棚のダルマさん達は、これもこれも、みんなお口をうんミむすんでお目はギロリ、にらめつこの恐い顔をしてゐるでせう、ミころがおぢさんは赤いお顔はしてても、何時もニコ／＼笑ひ顔で、ニコ／＼おぢさんつて云ふお名前がある位なんですもの、すぐ分るでせう。

ミころが或晩のころ、そのニコ／＼おぢさんも、お家の人達もみんな寢てしまつて静かになるミ、お店では何時の間にかダルマさん達がみんな集まつて、ぐるりミ輪になり、何か御相談

をはじめたのよ、なんの御相談なんでせう。

それはね、「あのニコ〜おぢさんをひきつおこらせてみやう」つゝ云ふ御相談なの、ダルマさん達は生れるこすぐ此のお店に連れて來られて、あの棚に飾られるけき、お店に來て誰もおぢさんの怒つたお顔をみたこごがないんですつて、

「ねえ、みんなさうしたらあのニコ〜おぢさん怒るだらうね」

「なんこかして、あのおぢさんが怒るやうなこごみんなで考へ様よ」

「ほんごにあのニコ〜おぢさんの怒つた顔つて一ぺんみたいなあ」

「ぢや、こごしたらさうだらう」

まめしぼりの鉢巻をしたダルマさんが、ゴロリ前に出て、みんなの顔をみまはしながら

「明日までにみんなが一人つゝ考へておいて誰が一番先にあのおぢさんを怒らせるか競争したら」

「それはおもしろい」

「それがいゝ〜」

いよ〜相談がきまるこ、みんなはめい〜自分の場所にかへつて一生懸命考へたのよ、こころが一番高い棚の上に色のさめた大きなダルマさんがゐたの、そのダルマさんはこのお店の

看板みたいで、ずつとむかしからこのお店でいばつてゐるのよ、このダルマさんも一生懸命考へたけれど、さうしてもいゝ考へが出て来ないの

「困つたなあ、困つたなあ」

お店の柱時計がボン／＼／＼／＼

あ、四時だ!! お窓がうす明るくなつて来たわ

「弱つたなあ、弱つたなあ」

大きなダルマさんはまだ考へてゐるのよ、もうすぐあのニコ／＼おぢさんが起きて来るよ云ふのに、

「もう／＼いゝ考へが出来たぞ」

大きなダルマさん、さんないゝ考へが出来たのかしら、

「ようし、おぢさんが起きて来たら、今までの恐い顔をもつ／＼恐くしてあのおぢさんがびつくりして、ニコ／＼出来ないやうにしてやらう」

さう云ふと、今までだつてダルマのうちで一番恐い顔していばつてゐたのに、其の上お目を一層ギロリと大きく光らせて、お鬚もぐつと太くしお口をうん／＼むすんだお顔は誰がみてもびつくりするほど恐いわ

だん／＼明るくなつて、あちらこちらのお店の戸のあく音や牛乳屋さんの車の音、ラヂオ體操のピアノがにぎやかに聞えはじめました。

「おや／＼今朝はうちが一番遅くなつてしまつたよ」

ニコ／＼おぢさんがニコ／＼笑ひながらお店の戸をあけはじめると、お日様がお店のダルマさん達を一つのこらす、ぱあ／＼つゞみ明るく照しました。

さあ誰が一番先におぢさんを怒らせるでせうね

其の時賑やかな聲がして學校へ行く子供達がお店の前を通りかゝりました。

「おや君？」

君、ちよつとみてごらん、あそこの一番上の棚にまつても恐い顔したダルマさんがゐるぢやないか」

「それ？あ、ほんまだ、随分こはい顔してるなあ」

「あんまり恐い顔してゝなんだかにくらしいねえ」

「あいつ、いぢめてやううか」

「うん」

四五人の男の子が道ばたの石を拾つて、そつこお店に近づいて來たの、お店にはおぢさんも誰もゐません。

「いゝから、一二三で投げるんだよ」

「ほら、一二三!!」

みんなの投げた石は大きなダルマさんのお腹さあのこはい顔に穴をあけてしまつて、おまけに、棚の上からゴロンところがり落ちたもんだから、下の棚のダルマさんにぶつかつて、ゴロンと、またその下のダルマさんもゴロンと、お店中ゴロンと、お店中ゴロンと、ダルマさんのころがりつこが、はじまつてしまつたのよ

「やあ、おもしろい〜」

「みんなころがり出したよ」

子供達は手をたゝいて面白がつてるの。

「おや〜〜〜これは大變なこゝになつた」

おぢさんはびつくりして奥から出て來ましたがちつぱりニコ〜してゐるの、そして二つ二つ棚からおつこちたダルマさん達を拾ひ上げては手拭でよくふいて棚に上げてゐます。

「おや!このダルマさんは怪我をしてしまつたね、可哀さうに」



さう云つておぢさんは怪我をしたダルマさんは別に、みんな一つくならべてゐましたが、ふき氣がついてお店の前にある子供達の方をむいて

「坊ちゃん達や、道草をしてゐるを學校がおくれますよ」

つてやつぱりニコく顔でさう云ふ。一番前にゐた子供がもぢく出てゆきながら

「おぢさん、ごめんなさい。僕、僕達がいたつらしてダルマさんをおつこゝしたんです」

さう云つて丁寧に頭を下げます。後の子もみんな出て来て

「おぢさん僕もしたんです、ごめんなさい」

「僕も、ごめんなさい」

こゝ一緒におじをしたのよ、するをおぢさんはニコく顔を一層ニコくにして

「あゝ、いゝさもくそんなにおじぎをしなくつても、いゝんだよ、それより坊ちゃん方はほんまに正直でえらい、悪いことを知つてすぐあやまる、みんなは大きくなつてきつゝ偉い人になれるよ。

おや、おしやべりをしてゐるを學校がおくれますね、早くいらつしやい」

「おぢさんほんまにごめんなさい、それぢや行つてきます」

「行つて來ます」

みんなは走つて行つてしまいました。おぢさんはみんなの後姿をいつまでもみつめながら

「あゝ、いゝ子だゝ」

つて、やつぱりニコくしるのよ、ダルマさん達はびつくりしてしまつて、おぢさんを怒らせるこゝなんか、すつかり忘れてしまいました。

その晩またお店では、ゆうべの様にダルマさん達が集まつてゐました。おやゝ頭やらお腹やらに繃帯をしてゐるダルマさんがたくさんゐますこゝ、あの大きなダルマさんも、やつぱりお顔とお腹に繃帯をして真中にゐます。

「私たちは本當に馬鹿だつたなあ、あんないゝおぢさんを怒らせる相談なんかして」

「ほんまに偉いおぢさんだ」

「こんなやさしい、いゝおぢさんはどこへ行つたつてゐやしないよ」

「僕達、ニコくおぢさんのお店に來られて、よかつたね」

其の時、真中の繃帯のダルマさんが

「こゝろでみなさん、私達は朝から晩まで、こんな、おこり顔して誰も笑つたものがない、今朝は私が何時もより、もつこ恐い顔しておぢさんをおこらせ様におもつたら、あの子供達が私をみつつけて、おこり顔がにくらしいミ石をぶつけたのですよ、だから怒り顔をしてゐるこゝみ

んなにくまれる。

ねえ明日からみんなニコ／＼おぢさんの様にニコ／＼笑ひ顔のニコ／＼ダルマにならうぢやありませんか」

次の朝からニコ／＼お店のダルマさんたちは、どれもみんなニコ／＼顔のニコ／＼ダルマさんになつてしまつたんですつて、

それぢやニコ／＼おぢさんもこんごはダルマさんごまちがへられるかもしれないわね。

をしまひ

# 「劇あそび」について

東京市麴町區富士見幼稚園 山村 喜 よ

去る三月五日東京市保育會に於て「劇あそび」について發表させていたゞきましたが、十五分といふ限られた時間の爲に充分お話し結びを付ける事が出来なかつた様に思れますので、この紙上を拜借してもう一度簡単にのべさせていたゞく事といひました。

## 一、「劇あそび」いふ言葉について

この言葉は私が勝手につけた名前前御座いまして舞臺面に表はれましたところは小學校兒童、又は幼稚園兒童によつて行はれて居りますあの童話劇と同じ様なもので御座いますが、たゞ内容に向つて目ざして居ります諸點が大部相違してゐるので御座います。たゞへば兒童劇、童話劇の場合は、ある立派な脚本のものに限られた人數の者が出演して時はこの方面の才能の見出されない者はいつまでたつても舞臺にのせられぬいふ様な事もあり勝ちです

し、こに角劇としての効果を充分表はす爲に苦心されてゐると思ひます。しかし幼兒の場合には才能のあるなしにかゝわらず皆が演じ度いのでございまして、しかも見せる爲に上手にやる等は考へられぬ事で御座います、したがつて今までに造られてあります童話劇・兒童劇の脚本集等見ましても幼兒向きと思はれますのが少い様に思はれます。

こに大人の演劇は立場を異にしてゐるこはいへやつぱり觀客を對氣として

脚本↓演出↓出演者　いふ様なある「つながり」を持つて考へられてゐる關係上そのまゝ使用する事は無理な場合が多いと思ひます、しかし幼兒等は「お話」も同様にこの童話劇を見る事が大好きで御座いますしこに自分等で演ずる事は大好きで御座います。それで私もお話の立體表現でも申しませうか、いわゆる「お話遊び」をして斯様なもの

も試みて居りますが、これは演じて居る者のみが非常に興

味を持つたり又喜びますが、見て居る者にはあまり興味も

なさそうですし、やはりある限られた人数に支配される事

も御座いますので(いろ／＼方法にもよりますが)ある時

には子供等の觀賞物にもなります様に(お節句とかお誕生

祝とかの集りの爲に)ある種の劇的要素をも含ませ、見た

めのものでもあり、聞く爲のものでもあり、しかも大勢が

一諸になつて遊び遊ばれる様な……又この遊びを通してい

ろ／＼の效果をおさめて行き度いと思ひまして「劇」に似

たものでは御座いますが、劇としての效果を充分に表はし

得ません幼児等に、遊びの材料として又觀賞物の一つとし

て與へ度いものも勝手な名前をつけて現在行つて居るもの

で御座います。

## 二、目的

あるところまで兒童劇・童話劇の目的を共にする事が出

来ると思ひます。そして自然の遊びのうちにも物真似を好み

遊戯を喜ぶ本能の満足と美的教化の一部面を持つて居ります。又各保育項目の「つながり」も出來て次に擧げられる

様な效果が實際に得られる様に思はれるので御座います。

## 三、效果

(イ)、幼児自身の自己満足

(ロ)、生活の明朗化

(ハ)、正しい言葉と發音の指導

(ニ)、注意力の養成と、ある落ちつき

(ホ)、その他

## 四、方法

(イ)脚本について

始めにも申のべました様に大勢の幼児が一緒に遊び遊ば

れるといふ條件のもとに、現在知つてゐるお話から、テ

マを取るとか、習ひおぼへた遊戯、唱歌等がある言葉、動

作でつなぎ合わせるとか、又は幼児時代の夢を現實化して行

くとか、いろ／＼材料はあると思ひますがどこでも對照が

「幼児」であるといふ事を考へて造つて行き度いと思ひま

す。そして勿論ある段階をふんで簡單なものから複雑なもの

に進む必要が御座います。しかし又あまり時間のかかり

ますものは幼児等(出演者)全體の精神が集注しない様にも

思はれますので十分——十五分位で終るものが一番都合よい様に思はれます。

(ロ) 配役について

1、一人だけ活躍する様な主役をつくらぬ事。(脚本にもよりますけれど)

2、時々配役を取りかへて見る事

3、一番始めに言葉を發する幼児は出来るだけはつきりしてゐる者を選ぶ事。等々

(ハ) 臺詞について

1、出来るだけ言葉を短く

2、同じ言葉をくりかへしてすむところはむだな言葉を使はぬ様に

3、自然の會話の句調で保姆が口づたへする事(始めに變なアクセントで耳に入つた言葉はなかく、なほらぬ様でございませ)

(ニ) 動作について

1、特別の動作の外は出来るだけ幼児の自然にまかせ  
る事

(ホ) 伴奏について

1、是非共必要でございませ

2、レコード、ピアノ、唱歌隊、等々

(ヘ) 仕度について

2、化粧等は絶対にさせぬ事

2、立體的な物を頭につけるさか、平面的なおめんの様なものをつけるさかして簡単な仕度をしてもらふ事は非常に喜びませ。殊に「全部」の者に何かしら仕度をしてやるさか細い心やりが必要でございませ

3、自分の仕度は保姆の手をかりないでも出来るやうにごく簡單に

(ト) 背景其他について

物語りの立體化を助ける爲に背景、大道具、小道具等皆必要で卸座いますけれど「出来るだけ簡單に」、そして色調の具合など「下品」にならぬ様、又あまりにはなやかにならぬ様子供らしい可愛いものにし度いと思ひませ。

五、實際保育にまき入れての反省

てみましたら案外らくに話す事が出来た様で御座います。

「鯉職り」(年長組用)(約七分)

(登上人物)

父鯉、母鯉、子供鯉

雀、七、八羽 子供七八人

幕開くと空高く三匹の鯉職りが立つてゐる(子供を適當の臺の上のせ胸から大きな鯉(父鯉)と小さい鯉をさげ足を雲でかくレコードで靜かな音楽を少々聞かせ

父鯉「ずいぶんいゝお天氣だね」

母鯉「ほんま、こうして高いお空に立つてゐるま、さてもいゝ氣持だわ」

子供鯉「うれしいな、お山も見へるしお家も見へて」

この時雀の子二、三羽つゝ鯉職りのまわりを、チュツ／＼／＼云ひながらとび廻り最後に(雀のお宿)の唱歌を唄ひながら

退場

父鯉「雀さん達も嬉しそうだね」

母鯉「うれしいでせう、いゝ氣持ちそうに歌つてかへつて行つたわね」

現在私は日常保育にさり入れまして雨の日、冬の日等の室内遊びに、又お誕生會、お節句、保護者會等の集りの時にもいたして居りますがほんまに幼児等が喜びまして、つい先頃の唱歌遊戯會練習の頃にはこの「劇遊び」の爲に缺席が少くなつたさいつてもよい位喜んでいたしました。又この爲にいろ／＼の効果もおさめる事が出来まして、内氣な者が大變活躍いたしましたり、又始終無口であまり保母さまお話の出来なかつた者が急に話し出す機會を造つたり等いたりしまして喜んで居ります。たゞ考へねばなりません事は、さうしても私自身が幼児と共に夢中になり勝ちで長い時間室内に入つてゐたり、見せる爲に苦心したくなつてまゐりますので充分注意いたして居るつもりで御座います。紙面に限りが御座いますので、さうかと思ひますが、お許しいたゞげる範圍に於いて、今まで實際にいたしました脚本を季節によつて、又簡單なものからだん／＼のせさせていたゞくつもりで御座います。さうぞ充分の御批判を願ひ申上げます。次にのせました「鯉職り」は昨年五月のお節句に年長組幼兒全體でいたしましたもので御座います。大勢の子供に對話させます所の對話の言葉の順に子供を列べ

子供鯉「ぼく雀さん達と遊び度いね、遊んでもいい？」

母鯉「いけません〜」

父鯉「雀さん達にはお羽根があるからいゝけれど」

母鯉「あなたはお母さんと一緒にでなければだめよ」

父鯉「もう少し立つたら、太郎さんのお家のお蔵へしまつていたゞくんだからね」

母鯉「又來年の今頃になつたら出していたゞきませうね。」

子供鯉「つまないなあ」

子供七人(鯉幟り)の唱歌を唄ひながら出て來る。

父鯉「あつ……人間の子供が來るよ」

母鯉「可愛いゝ坊ちゃんやお嬢ちゃん達ね」

父鯉「何かして遊ぶんだらう」

母鯉「だまつて見てゐませうよ」

子供等だん／＼雲の近くまで來て少しはなれたところで止り鯉幟を見あげる

子供1「大きな鯉幟りだなあ」

子供2「うん、すいぶん大きいね」

子供3「あの一、番大きいのがお父様鯉よ」

子供4「あの赤い大きいのがお母様鯉でせう？」

子供5「お母さんのそばに居るのが赤ちゃんよ」

子供6「かわいゝ赤ちゃんね」

子供7「これ太郎さんの家の鯉幟りよ」

子供1「すいぶん立派だねえ」

子供2「僕のはお座敷にかざつてあるよ」

子供3「私のお兄さんの鯉幟りもかざつたわ」

子供4「今はこのお家にもあるんでせう」

子供5「だつて男の人のお節句ですもの」

子供6「あゝ、そうだつた、早くかへつて太郎さんのお家へ

およばれに行きませうよ」

子供7「うん、ただけ鯉幟りのまわりでおきつてからにし

ようよ」

子供6「えゝ、それがいゝわ」

一同(鯉幟り)の遊戲一回踊り終つて、歌ひながら退場

子供鯉「あゝ面白かつた」

母鯉「太郎さんのお家はにぎやかでせうね」

父鯉「あゝ、きつみにぎやかだらうよ」

この時遠くの方から(鯉幟り)の唱歌がすかに聞へて來る

——靜かに暮——



## 時局の保育、時局の影響

島根縣女子師範學校附屬幼稚園

本稿は以前に寄せられたものでございまして、紙數の都合にて今月號に掲載させていただきます。(記者)

### A (時局の保育)

北支の戰雲急を告げるや、聯隊の所在地である當地に於ては殊の外緊張を續けておりましたが、程なく當聯隊も出動することになりまして、全町騒然たる中に極度に緊張致しました。夏休み中の事とて、我が園舎も出動準備の場所として提供しました。赤檉を掛けた幾多の應召兵、軍用自動車の右往左往、かくすること旬日ならずして形容の語もない程の感激裡に、出征兵士を見送りました。此の時から子供達の頭には如何に強く非常時局が認識された事でせう。此の秋、私達保育の任に當ります者の心すべきことは

一、非常時の爲に幼き子に烈しい衝撃を與へないやうに心して、天皇陛下の御稜威に輝く日本は有難い神國であ

るこの信仰を持たせること、忠勇なる皇軍將士の奮闘に信頼して、元氣よく楽しく遊び、きれいな強い心と體を養ふこと

二、事變の性質を子供なりに正しく理解させること

三、時局の種々なる相に觸れさせて、子供なりに其の情操を培ふこと

以上の様な観点から従來の保育を亂さないで、或は従來の施設の中に特に強調し、又新に加へて保育に資することにしなす。今其の特色あるものについて述べます

### 一、皇居遙拜

日夜事變の上に、國民の上に御心を御憐れ給ふ、天皇皇后陛下の御仁慈は申すも恐れ多いこととございます。此の御高

恩に對しまして心からなる感謝を捧げると同時に、兩陛下の御健康を祈つて毎朝東の空を遙拜致します。保姆も子供達も一つになつて、眞心こめて拜した後はすつかり心が落着いて、一日の生活が力強く感じられます。此の事は従來も行つて来たことですが、一層心して續けることに致しました。

### 二、神社參拜

園から程遠からぬ所に縣社石神神社があります。毎月一日と十五日には全園擧つて參拜することに致しました。日頃のいたづらつ子も、此の時は誠に眞剣な姿で眞心こめて國威宣揚と皇軍の武運長久を祈ります。

### 三、時局を認識させる

子供達は毎日新聞やラヂオで報ずる時局ニュースをかなりよく知つてゐます。殊に男兒は色々な事をよく知つてゐまして、日本軍は今何が爲に戦つてゐるか多少理解してゐる者もあります。更に一般幼児に正しく時局を認識させる爲に、大きい支那地圖を作つて掲げました。子供

に分りやすく色附の鳥瞰圖にして、日本軍の占領した地へは戦況を子供達と話し乍ら日の丸の小旗を立て、行きます。

又大毎寫真特報をとり、来る度に之を觀察させ、お話してやります。其の後に掲示板に掲げますと、子供達は色々話し合ひ乍ら尚も詳しく觀察致します。其の他、毎日の新聞、子供の新聞等から資料を得て、應召美談、戰場美談、銃後美談等をお話してやります。併し幼児の心を傷ける様なむごいお話は避けます。それと共にどこまでも時局を正しく認識させると言ふことに中心を置いてゐます。今、日本は戦つてゐますけれど、之は支那民衆を相手にする戦ではありません、東洋平和を目指して悪い支那兵に反省を促す爲の戦でありまして、決して支那の人達を憎まぬ様、むしろかゝる國家に生れた彼等に同情して、速に迷ひの目を覺させ提携して平和な生活を營むことの出来る様に願はなくてはならないことを知らせます。

#### 四、應召者の家族及戦死者の遺族慰

#### 問、白衣勇士慰問、慰問袋作成

事變以來子供達のお父様の出征は七人でありませんが、彼の北支の山岳戦に於て既に三人の名譽の戦死を出しました。現在は四人のお父様方が彼の地に戦つて居られます。吾々保姆は時々其の留守宅を見舞ふと同時に戦死者遺族の方々を見舞つて慰め勵ますことにしてゐます。幼児達は、戦地の兵隊さんや、歸隊してゐる白衣の勇士に送る折紙等を製作をして、慰問袋に入れて送りました。病院には幼児達の製作品を持つて、代表者数名が園長先生や保姆の先生と共に慰問に行きました。家族慰安會には幼児の可愛い、遊戯も演出して慰めてあげます。

#### 五、資源愛護

長期抗戦の止むなきに至つた重大時局をお話して、私達國民のとるべき態度を分り易く話してやりました。物を丁寧に扱ひ、粗末にせぬ様にと言ふことは平素から言つてはゐますが、更に幼児達の反省を促しました。又棄てる様なものでも、再生の出来るものは出来るだけ注意して

再生させなくてはならぬ事を理解させまして、幼稚園生活に於て紙屑や銀紙を集めることを早速實行にうつしました。

#### 六、遊戯唱歌觀察談話手技

子供達の頭に浸みこんだ時局は、そのまゝ子供達の生活となつて再現されます。見る物、聞く物、歌にお遊戯に凡て時局のものを喜びます。子供達の要求にしたがつて、晩秋から年末にかけて久しく時局にちなんだ生活を營みました。

#### 七、體育向上について

此の時局に當り、幼児達は何をしたら一番國の爲、君の爲になるかを話し合ひ、賢い子供になると共に強い體を作ることに必要を理解させました。

ラヂオ體操は平素から行つてゐることでありませけれど、皆が強い體になる爲にはもつと本氣でしようとお約束して、毎朝晴天には園庭で、雨天にはお遊戯室で曲に合せて元氣よく行つてゐます。お天氣には出来るだけお庭へ出て遊ぶ様にしてゐます。併しこれは私達が強ひてすゝめる必要もなく、子供達は雨さへ降

らなかつたらどんなに寒くても、外で元氣にブランコにシーソー、戦争ごっこ等をしてゐます。

氣候のいゝ頃ですと、一週一回の豫定で、近くの城山や町を一目に見下されるお宮のある丘、射的場、海邊の砂濱等へ園外保育を致します。

齒みがき訓練も消極的ではありませんが、體育向上の一つとして食後實施致してゐます。幼稚園ばかりでなく、同時に家庭でも行ふ様に奨励してゐます。

その他、常の事ではありますが、衛生方面の注意を色々致しまして此の際特に皆が元氣に強い體になります様勵まし合つてゐます。

### 八、躰について

先づ私達は銃後にあつて、どんなお行儀の子になつたらよいか話し合つて次の事を約束致しました。

- 一、お父様、お母様の言ひつけを聞くこと
- 二、朝晩神佛を禮拜すること
- 三、我儘を言はないで少し位の不足を我

慢すること

食事は何でもよるこんでいたゞくこと

お家で着せて下さる着物、與へて下さる持物で満足すること

玩具や繪本を無理に強請らぬこと

四、物やお金を無駄に使ふことは慎しむこと

毎日もらふお小使は貯金箱(幼兒製作)に入れること

いらぬ物を買はぬこと

紙を粗末にせぬこと

銀紙は集めて幼稚園へ持参すること

自分の持ち物、或は使用物は丁寧に扱ふこと

五、自分で出来ることは何でも自分でして家の人々の手間をとらぬこと

自分で着物を着ること

用具の仕末は自分ですること(カバン、ブック入・帽子・オーバー・手袋・マスク、クレヨン・鉄・繪本)

玩具の仕末を自分ですること

女中を無暗に使はぬこと

六、出来ることはお手傳ひすること

お使ひをする

お庭のお掃除、雑布がけのお手傳ひ

七、兄弟やお友達とは仲よくして何でも一緒にすること

一緒に遊ぶこと

一緒に遊ぶこと

仲よく一緒に遊ぶ。遊んだ後の整理は一緒にすること

### B (時局の影響)

自由遊びに現はれたもの

平素でも軍事遊びを好みますが、事變以來特に目立つて來ました。男兒は演習帽をかぶり、鐵砲を持ち、聯隊旗を立て、毎日の様に戦争ごっこをします。突撃の後は築山や、杵登りに上つて鐵砲を上げ、旗を掲げて萬歳をします。室内では椅子をよせ集め、積木を使用して、大きい飛行機や、軍艦、大砲、トーチカ、サイドカー、タンク等をつくつて集つて遊びます。空になつた積木箱の中に、かくれては、壘壕だと云つて喜んでゐます、砂場でも、飛行機や、軍艦の形がつくられ、それに乘つて遊んでゐます。

女兒は國防婦人會員になつて、兵士にな

つた男児を見送つたり、看護婦になつて、負傷者を助けたりして、一緒になつて遊びます。時には女も兵隊だと言つて、鐵砲をかついで行進したりします。男兒と異つて射撃はしますが、突撃はしません。

又防毒マスクを作つて防空演習の眞似もします。

二、自由製作に現はれたもの

子供達はボール紙を時々ねだります、自由に使へる様にしておきますと、日本刀、ピストル、水筒、飛行眼鏡、肩章等を作つて持つて遊びます。又新聞紙で、看護婦帽や演習帽をつくります。

次に幼兒の自由製作の統計を掲げますが、之は二日間に亘つて全園兒に、ボール紙、畫用紙、色紙、空箱、テープ、糊、等の材料を與へて自由に製作させたものです。

男兒(四十二名)	女兒(四十一名)
軍刀 二〇	日の丸の旗 二
勳章 五	兵隊の面 二
ピストル 一三	勳章 一
鐵兜 七	汽車 一

背囊	二	家	二
戰車	三	タンス	一
飛行機	三	人形	二〇
飛行船	一	ダットサン	一
手榴彈	四	ランドセル	一
兵隊の面	五	積木	一
軍旗	一	蝶々	一
青龍刀	二	果物	七
鐵砲	一	ハイヤー	一
肩章	二	星	一
落下傘	一	ヤクワン	一
兵隊さん	一	籠(空箱利用)	三
汽車	二	紋型切紙	四
鬼面	二	時計	一
家	二	折紙	二
ポスト	一		
貯金箱	一		
室内調度品數種	一		
紋型切紙	三		
折紙	九		
總計 九十二點		總計 七十一點	
軍事に關する 七十一點		軍事に關する 四點	
その他 二十一點		その他 六十七點	

三、繪畫に現はれたもの  
自由畫と言へば、平素でも男兒は軍事的なものを好みますのに、事變以來殊に目立つて來ました。軍艦、飛行機、高射砲、大砲、戰車、裝甲列車、トーチカ、城壁、城内等その繪は常に活躍したものです。盛に火を吐いてゐます、爆彈投下の様や、敵の飛行機が墜落する繪が最も多くございます。或る日の全兒の自由畫を統計にとつて見ましたから次に掲げておきます。

男兒(四十五名)

軍艦	二	室内遊び	二
戰車	二	お庭の遊び	三三
飛行機	四〇	山遊び	六
タンク	二	川遊び	八
汽車	一	動物	二
風揚げ	二	家	二
山遊	三	お使ひ	三
富士山	一	雨降り	一
動物	一	初午	一
桃太郎劇	二		
總計 五十七枚		總計 五十七枚	
軍事に關する 四十五枚		軍事に關する 無	
その他 十二枚		その他 五十七枚	

四、其の他

子供同志の會話及び、先生のところへ持つて来る會話は、昨年末までは、出征兵の見送のこと、召集兵を見たこと、負傷兵の歸つたこと、戦死者の遺骨を出迎へたこと、ニュース映畫を見たこと、新聞やラヂオの報道を聞いたこと等が非常に多かつたのですが、年新になつてからは、こんな事もございませんし、子供達の話も殆ど平素に復しました。

軍歌を非常に好みよく覚えて來ます。進軍の歌、露營の歌、陸軍の歌、愛國行進歌等殊に喜びます。

時局及軍事知識に就いて幼児の理解の程度を調べて見ました所、次の様な答を得ましたから御參考までに記して見ます。

尙調査人数は、男兒四十三名、女兒四十五名です。

第一問 何故支那と戦争してゐるでせう

支那が悪いから 四〇名

支那が悪いことをするから 一八名

支那の兵隊が悪いから 三名

日本の云ふことをきかぬから 四名

支那がはじめに向つて來たから 九名  
支那が降参せんから 五名

日本が演習してゐたら支那が機關銃で撃ち出し友達が死んでもこらへてゐたがやつぱり撃つので敵の物見臺をぶちこわした 一名  
知らない 一五名

第二問 戦争に行かない者はどうして居ればよいでせうか 二七名  
良いお行儀をする 八名  
慰問袋をつくつたり慰問したりする 四名

戦争の練習をする 四名  
後から行く 二九名  
働いてお手傳ひをする 一四名  
勉強する 二名

紙や銀紙を大切に 二名  
お金を使はず貯金する 五名  
献金する 一名

お國で用心して自分の務をする 一名  
仕事をして神様を拜む 一名  
怠けず仕事をして天皇陛下には 一名

忠義をつくし、幼稚園では一生

懸命に色紙等をし學校でもよく 一名

勉強する 一名

第三問 飛行機にはどんなものがありますか

偵察機 三名。戦闘機 一〇名。爆撃機 一六名。水上機 二六名。旅客機 一四

名。重爆撃機 一六名。神風號 一二名。赤十字機 一名。海軍機 二名。九

一式戦闘機 一名。オートジャイロ 一名。飛行船 二名。プロペラの無いもの

二名。ピンとした強いもの 一名。一つ羽のもの 二つの羽のもの 四名。支那

の飛行機 一名。日本の飛行機 一名。分らぬ 十五名。

第四問 大きくなつたら何になりますか

男兒 兵隊 一八名。大將 七名。飛行家 四名。部隊長 二名。大尉 一名。陸軍大臣 一名。陸戦隊 一名。工兵 一名。

東郷元帥の様な偉い人 一名。乃木大將の様な偉い人 一名。少佐 一名。西郷

隆盛 一名。海軍大尉 一名。齒醫者 一名。附屬小學校の先生 一名。ダットサ

ンの運轉手 一名。

女 兒

お母さん 一五名。お嫁さん 八名。お姉さん 七名。看護婦 三名。ねえや四名。幼稚園の先生 三名。小學校の先生 一名。級長 一名。えらい子 二名。女給 一名。

第五問 日本と仲良しの國がありますか。

支那を助ける國がありますか。

(日本と仲良しの國)

イタリー 三〇名。ドイツ 三〇名。滿洲國 二四名。フランス 四名。イギリス 二名。アメリカ 二名。ロシヤ 一名。分らぬ 二五名。

(支那を助ける國)

アメリカ 二三名。イギリス 一五名。ロシヤ 二六名。フランス 一四名。ドイツ 二名。分らぬ 三三名。

私達の願ふ所は唯、平靜な子供の生活の中に於て、自然に時局を認識せしめ、時局に適應するように保育して行き度いと思ひます。

## 今夏の文部省主催保育講習に就いて

從來隔年に東京に於いて開催せられてをりました文部省主催の保育講習が、今年も七月二十一日から二十七日まで七日間東京女子高等師範學校にて開かれることになりました。文部省當局のこの御配慮は、斯道發展の爲に誠に有難く、喜ばしいことと存じます。一人でも多數の方の御聴講を希望してやみません。

保育の問題を倉橋氏、手技を及川氏、保育の實際について新庄、菊池、清水の諸氏竝に幼児の保健衛生を斯道權威者が各々擔當せられる由であります。

詳細については七月初旬の官報に發表されますし、本誌來月號にてもお知らせ致します。聴講希望の方で手續が後れるといけませんから今から各地方廳へお申し込み置きになるのが御便利かと思存じます。

# ハイ デイ

(第四回)

東京女子高等師範學校教授 津 田 芳 雄 譯

ペーテルはほかにあまり覺えて置くこゝろがないので、山羊たちの名前位は充分心得てゐて、一々指さして教へてくれた。ハイデイはそれをよく聽いて、山羊たちの特長も氣をつけて見てゐたので、間もなく山羊たちを一々見分けて名前と呼ぶこゝろが出来たやうになつた。先づ角の大きいのが「トルコ人」ミいふ名前前で、始終仲間突つかからうミする。ほかの山羊たちは「トルコ人」が来るミ遁げて、この亂暴者を避けた。中に一匹だけ「トルコ人」を怖がらないのがゐた。それは「ひわ」ミいふ細つそりした、すばしこい山羊で、三四度續けざまに「トルコ人」に角を突つかけて、「トルコ人」が吃驚して立すくむミ、更に身構へをするのだつた。す

るミ「ひわ」の角は鋭くはあり「トルコ人」もそのまゝ仕掛けやうミしなかつた。それから「ゆき」ミいふ眞白な泣蟲の仔山羊がゐた。今までも何度かハイデイは、その悲しさうな訴へるやうな泣聲を聞いて、駈けつて行つては、首を抱いて慰めてやつたのだつたが、この時丁度同じ泣聲が聞えて、ハイデイは急に立上つて行つて、首を抱きながらやさしく云つた。

「ゆき、さうしたの、さうしてそんな悲しさうな聲を出すの」

するミ、山羊はなれ／＼しくハイデイにすりよつて、泣き止んだ。そこへペーテルが坐つたまゝ——彼はまだお辨當を終つてゐなかつたが——大

聲で

「その山羊はね、親がるなからそんなに泣くんだよ。一昨日、町で賣られつちまつて、もう山に來ないんだ」

「親つて？」

「その山羊のお母さんさ」

「ぢや、おばあさんはどこにゐるの」

「おばあさんなんかいないよ」

「おぢいさんは」

「おぢいさんもないよ」

「まあ、可哀さうに」

「ミ云つてハイディはその仔山羊を抱きよせながら

「でも、もう泣かないでね。そら、わたしが毎日登つて來てあげるから、もう一人ぼつちぢやないでせう。何か欲しい時はわたしの所へおいで」

「ミ云つた。するミ仔山羊は嬉しさにハイディの肩に頭をすりつけて、もう泣かなくなつた。やがてペーテルも食事を終つて一緒になり、山羊た

ちはめい／＼また草をはみに岩山の方へ登つて行つた。が、ハイディはその間に山羊たちのこころを色々観察してゐた。彼女は山羊たちの中ではおぢいさんの「白鳥」や「小熊」が際立つて美しくもあり、お行儀もい／＼こころに氣づいてゐた。二匹は例の「トルコ人」なき寧ろ輕蔑して何きも思つてゐなかつた。そしていつも一番い／＼草を見出して、品のよい姿勢で食べてゐるのだつた。ハイディはそのこころをペーテルに云ふさ、ペーテルは

「おぢいさんもさ。あの二匹が一番綺麗ださ。アルムおぢいさんが洗つてやつたり、鹽をやつたりするんだもの。それに小舎だつて、すつ／＼い／＼からね」  
それから、いきなりペーテルは、ねそべつてゐる地面からはね起きて、山羊の方へ駆け出した。ハイディも何事かと思つて、そのあきをつけた。ペーテルは危い崖の方へ走つてゐた。彼は「ひわ」が無鐵砲にも、危険な所へすん／＼近づいてゐるのを見つけたのだつた。彼はやつこの思ひで「ひわ」が崖から落ちるのを止めるこころが出來た。「ひ



わはもう崖の縁に着いてゐたので、ペーテルは體を投げ出してひわの後脚を掴まなければならなかつた。するま「ひわ」は不意を喰つて、わめき立て、ペーテルの手を振りきらうとする。ペーテルは起きるこぎが出来なくて、山羊の脚をもぎりさうになつて、ハイディの助を呼んだ。ハイディはもうそこへ駆けつけてゐて、直ぐにペーテルと山羊の危い様子を見てまつた。彼女は早速にいゝ匂のする草を一束摘みまつて、それを山羊の鼻先に差し出しながら、すかすやうに云つた。

「これ、これ、ひわさんや。おいたをするんぢやありませんよ。あそこへ落つこちて、脚を折るぢやないの。そしたら痛いこまよ」

するま若い山羊は直ぐに振向いてハイディの手の草を食へ始めた。そのひまにペーテルは立上つて、山羊の首に巻いたベルの附いた紐を掴み、ハイディも向ふ側から同じ紐を掴んで、二人でほかの山羊の所へ連れて戻つた。それからペーテルは笞を振上げて、ひびく「ひわ」を打たうとした。「ひ

わ」はそれを見て縮みあがつて避けた。がハイディが叫んだ。

「いや、いや、ペーテル、打つちやいや。あんなに怖がつてゐるぢやないの」

「打つこかなくちやいけないんだよ」

ペーテルは唸るやうに云つてまた笞を振上げた。するまハイディが彼に跳びついて、怒りながら叫んだ。

「怪我をさしちやいけない。ほつて置いて」

ハイディの眼はきらめいてゐた。ペーテルはその命令するやうな態度を見て笞を下しながら云つた。

「明日またチーズをくれるなら許してやる」

ペーテルはあくまでも吃驚させられた辨償を求めた。

「みんなあげるわ。今日あげたやうな大きなのを。だけま「ひわ」でも「ゆき」でも、まの山羊でも、きつまつたないお約束をしなくちやいやよ」

「あー、いいわ」

さいふのはペーテルは約束を承知したと云ふのだつた。それで「ひわ」は漸く許されることになつて、仲間の方へ悦んで跳んで行つた。

さうかうしてゐるうちに、いつの間にか夕方になつた。太陽はもう山影に沈まうとしてゐる。ハイディは再び地面に坐りこんで夕日に光る花を黙つて眺めてゐた。草も花も、上の方の岩まで金色の光を浴びて輝いてきた。ハイディは突然立上つて

「ペーテル、ペーテル、すつかり火事よ。岩がみんな燃えてゐるわ。それから大きな雪の山も。それから空も。まあ御覽、あの高い岩が火で真赤よ。まあ綺麗だこゝ、火の雪よ。ペーテル立つて御覽。あれ、大きな鳥の巢のある所まで火事になつたわ。あの岩、御覽、あの縦の木を。すつかり、すつかり火事だわ」

「いつだつてあんなさ。だけさ本當の火事ぢやないよ」

ペーテルはおちつき拂つて笹の皮をむいてゐ

る。

「ちあ何なの」

ハイディはあつちに走り、こつちに走りして、あつちを見たり、こつちを見たりしてゐる。こんな美しい景色はいくら見ても見足りない様子である。「ペーテル、何なの、何なの」

「ひざりでにあんなになるんだよ」

「あら、御覽」ハイディは新な興奮を以て叫んだ。「今度はみんな薔薇色になつたわ。あの雪をかぶつた山を御覽。それからあの高い、尖つた岩山を。あれ何ていふ名前！」

「山に名前なんかあるもんか」

「まあ綺麗、あの真赤な雪を御覽。それからあの岩山にはこても澤山薔薇があつてよ。あれ、今度は灰色に變つてきたわ。あれ、あれ、ペーテル、今度は色がみんな、なくなつてしまつたわ」

さう云つてハイディは、何もかもが本當になくなつてしまつたやうな悲しさうな顔になつて地べたに坐つた。

「明日またあんなになるよ」

ペーテルは慰めてから「さあお立ち、歸るんだよ」

「ミ云つて、口笛を吹いて山羊を呼び集め、みんな一緒に山を下りだした。」

「毎日あんなの。山羊を連れて、こゝに上るこゝ、毎日あれが見えるの」

ハイディはペーテルさならんで下りながらさう尋ねた。そしてペーテルが「さうだ」ミ云つてくれればいゝと思ひながら、しきりミ返事を待った。

「大概の日はあんなだ」

ミペーテルは答へた。

「だけき、明日は屹度あんなか知ら」

「うゝ、うゝ、明日は屹度あんなだ」

ペーテルが保證してくれた。

ハイディはそれで氣嫌がなほつたが、頭は今日初めて受けた数々の印象で一杯になつてゐて、考へるこゝが多かつたので、小屋に着くまでは、もうそれつきり話をしなかつた。おぢいさんは樫の

木の下にも腰掛を造つてゐて、それに掛けて、自分の山羊が山から下りて来るのをいつものやうに待つてゐた。

ハイディは白い山羊と褐色の山羊が主人の方へ行くその先に立つて、おぢいさんの所へ行つた。するこゝ、ペーテルが後の方から「明日また一緒にお出でよ。おやすみ」ミ叫んだ。ペーテルがハイディに翌日また一緒に行つてもらひたいと思ふ理由は一つだけではなかつた。

ハイディは早速駆け戻つて、ペーテルに握手をさせて明日一緒に行くこゝを約束した。それから山羊たちの中に這入つて、「ゆき」の首をまた抱いて、やさしく云つた。

「ゆき、よくお休みよ。明日また一緒に行つてあげるからね。あんなにもう泣かないでね」

するこゝ「ゆき」は懐かしい、ありがたうさいふやうな目をハイディに投げて、嬉しさうにほかの山羊の後を跳んで追つて行つた。

ハイディは樫の木の方へ戻つて行つたが、まだ

おぢいさんの前に着かない先から

「おぢいさん、とても綺麗だつたわ。火事が見えてよ。それから岩山の薔薇だの、青い花だの、黄いろい花だの、綺麗だつたわ。これ御覧、おぢいさんに持つて来てあげてよ」

「云つて、前掛を開いておぢいさんの足もこに花を振ひおこすこ、さうでせう。花は今朝の美しさの見る影もなく萎びてしまつて、枯草のやうになつてゐるた。」

「さうしたんでせう。今朝はこんなぢやなかつたわ。さうして、おぢいさん」

「花はね、そこの日向に立つてゐたいんだよ。前掛の中に閉ぢこめられるのはいやだつてさ」

おぢいさんがさう云ふミ、ハイディは

「ぢや、わたし、もう花は集めないわ。だけぎ、おぢいさん、あの大きな鳥はさうしてあんなに鳴き續けたんでせう」

「また尋ねた。」

「おぢいさんは乳を榨つて来るから、あつちに行

つて體を洗つておいで。晩御飯の時にみんな話してあげるから」

ハイディは云はれるまゝにした。そして後になつて、おぢいさんならんで高い腰掛にかけて食卓についた時、また同じこを尋ねるミ、おぢいさんは

「あれは下の村の人たちをからかつてゐるのさ。あんまりごみくミ澤山な人が一緒に住んでゐて、悪口ばかり云ひあつてゐるものだから。『お前たちがめい／＼好き勝手に離れて、私のやうにこの高い所へ登つて住んだらよからうに』つて云つてゐる所だよ」

「さうおぢいさんの聲は殆んき激してゐるた。それでハイディにはそれが丸であの山の鳥の鳴き聲をまた聞いてゐるやうだつた。」

「山にはさうして名前がない？」

ハイディはまた尋ねた。

「名前はあるよ。一つその恰好を云つて御覧。名前を教へてあげるから」

ハイディは峰が二つになつた高い岩山の恰好を非常に正確に話しておぢいさんを悦ばせた。

「あー、さう〜。丁度そんな山だ。それはね」

「それから、ほかには」

今度は、廣い雪の原のある山のこみを云つて、

それが火事のやうになつたこみ、赤い薔薇色になつて、それから急にまた青白くなり、色がなくなつてしまつたこみなぎを話した。おぢいさんは「それも知つて居る」云つて名前を教へてやり、かう云ひたした。

「それで、山羊ミ山に行つたのはお前、面白かつたんだね」

それからハイディはその日一日の話をして、それが面白かつたこみ、特に、夕方急に、きこもこゝもが火事のやうになつたこみを云つた。そしておぢいさんがそのわけを云つて聞かさなければさうしても承知しなかつた。ペーテルに聞いても何も分らなかつたので。

おぢいさんは「それは太陽のせるだよ」云つて、

「お日様が山たちにさよならをなさる時にはね、お日様の一番美しい光を投げて下さるんだよ。さうして明日またお出でになるまで、山たちがお日様のこみを忘れないやうになさるんだよ」

云つて聞かせた。ハイディにはこの説明が嬉しくて、「早く明日になればいい。そして山羊たちもまた山へ登つて、お日様が山たちに『おやすみ』を云ふ所を見たい」思つた。けれども、それには先づ眠らなければならなかつたので、枯草のベッドに這入つて、ぐつすり眠りこんだ。そして、その晩の夢には、山々が一面に赤い薔薇色にかがやいてゐて、その中へ「ゆき」が楽しさうに跳びこんで來たり出たりする夢しか見なかつた。

#### 四、おばあさんのうち

翌朝、太陽は早くから前日同様にかがやき出した。それからペーテルが山羊を連れて現れた。そして子供たちはまた一緒に山の牧場へ登つて行つ

た。かうして毎日毎日過ぎて、ハイディは草も花の間に暮すうちに、日に照されて大變強くなり、病氣なご少しもしなくなつた。ハイディにはまたその毎日毎日が非常に楽しくて、緑の林の木に棲む小鳥のやうに氣も輕やかに自由な日を送つた。それから秋が來て風が強く吹くやうになるご、おぢいさんは時々云ふのだつた。

「ハイディ、今日はうちにおいで。急な強い風が吹いて來るご、お前のやうな小さいものは直ぐに岩から谷へ吹きさらされてしまふよ」

ペーテルは一人で行かなければならんご聞いた時にはいつもふさいだ顔をした。退窟なばかりでなくて、おいしいお辨當がたべられなくなる。それだけではない。山羊が云ふごきを聽かなくなつて、平生の二倍も手がかる。それ程山羊たちはハイディに馴れて、ハイディがゐらないご、好き勝手な方向へ駆け出して、先へは進まうごしないのだつた。

ところが、ハイディの方はきこにゐても何かし

ら面白いごを見つけて出して、ちつごも退窟するやうなごきはなかつた。尤もハイディだつて、ペーテルと一緒に花やあの大きな鳥の所へ行つて、澤山なものを見たり、色々性質の違つた山羊たちにまざつて、色々な經驗を試みたりする方が、そんなに好きであつたかわからん。けれどまた、おぢいさんが槌や鋸を使つて大工の仕事をするのを見てゐるのも面白かつた。おぢいさんが腕をまくり、大鍋をかき廻して、山羊の乳から大きな圓いチーズでも拵へる時は、ごでも面白くてしやうがなかつた。がごりわけハイディの心を惹いたものは、かういふ風の強い日の三本の樅の木であつた。ハイディは何をしてゐても、それをやめて、樅の木のてつべんに深い不思議な音がするのを聽きに行きくした。ハイディにしてみれば、こんな奇妙な、不思議な音はなかつた。それで彼女は、木の下にじつミ立つて、猛烈な風が吹きつけるまゝに、木のてつべんがお辭儀をしたり、横に揺れたりする様子を見上げながら、その大きな唸り聲

に聞き入つてゐるのだつた。

長い夏の間、照りつづけた太陽も、もう暖かではなく、日ましに寒さが加つて、ハイディは戸棚から靴や長靴下や着物を出して着けるやうになつた。そして椀の木の下に立つ時には風に吹き飛ばされさうになつた。それでも、そで枝が風に揺れる音を聞くミ、ハイディはうちにじつミしてゐるこゝは出来なかつた。

やがて、ペーテルが朝早く登つて来る時には手をふう／＼吹きながら来るやうになつた。が或晩大雪が降つて、緑の葉は一枚も見えなくなるミ、ペーテルが来るのも止んでしまつた。ハイディが大雪に驚いて、小さい窓から外を眺めるミ、来る日も来る日も、大きな雪びらが益々降り積つた雪が窓まで来さう。やがて窓よりも高くなり、窓が開かなくなつてしまつた。ハイディは面白くなつて、あちらの窓に駆けよつたり、こちらの窓に駆けよつたりして、家が雪に埋まつて、眞晝でもランプをつけるやうになるかと思つた。がそれ

程までは行かないで、雪は翌日やんでしまつた。おぢいさんはシャベルを持ち出して、家のまわりの雪をかいて幾つかの雪の山を拵へた。そしてもう窓も戸も開くやうになつて、おぢいさんミハイディは三脚椅子に掛けて爐にあたつてゐるミ、がたん／＼ミいふ音がして戸が開いた。それは體中眞白になつたペーテルだつた。彼はもう一週間もハイディに會はないミいふので、大變な決心で雪山を冒して來たのだつた。體にはまだ雪の塊が凍りついてゐた。

「今日は」

ミ、彼は云つただけで、火のそばにすつミよつたが、その顔はかうしてこゝに來た悦びにかがやいてゐた。ハイディは、その着物の雪が解けて水が瀧のやうに落ちるのを驚いて眺めてゐた。

「やあ、大將、ごうだい。兵隊がゐらなくなつたんで、今度はペンミ鉛筆の方だね」

おぢいさんが云ふミ、ハイディが直ぐにそばから聞きたがつて、

「さうして今度はペンシ鉛筆だつて」

「冬になるこゝ、この子は學校に行つて、読み書きを習はなちやならないんだよ」

それからペーテルの方に向いて、

「あゝで役には立たうが、ちよつと辛いね。さうだらう、大將」

「全くだ」

ペーテルはおぢいさんに賛成した。

ハイディは愈々面白くなつて、學校でするこゝ、見るこゝ、聞くこゝなき、何やかやと盛んに尋ね出した。その爲話が長くなつて、ペーテルの着物はその間にすっかり乾いてしまつた。ペーテルは元々自分の思ふこゝがよく云ひ現せない子であつたが、この時には、一つの間に漸く答が出来上つて、口に出さうとする所へ、ハイディがまた第二、第三の、しかも長い言葉で答へねばならぬやうな質問を連發するので、二重に骨が折れるのであつた。おぢいさんはそれを、唯折々口元に僅かに笑を浮べるだけで黙つて聞いてゐた。が漸く、「さ

あ、大將、もう大分暖まつたからお中がすいたらう。みんなでお茶にしよう」云つて、ペーテルが減多にたべないやうな御馳走を出してくれた。そのうちに日が暮れて来て、ペーテルは「ありがたう」を云つて表へ出た。その時ハイディの方を振り返りながら、

「來週の日曜日にまた来るよ。うちのおばあさんがね、ハイディちゃんに一度會ひに来ておくれつて、云つたよ」

ハイディには、よその家を訪ねて行くなんてこゝは今までに一度もないこゝだつた。それでペーテルの云つたこゝが頭を離れないで、翌朝起きるこゝ眞先におぢいさんに云つたこゝは、

「おぢいさん、わたし、おばあさんの所へ行かないわ。わたしを待つてるから」

こゝいふのだつた。が、おぢいさんは

「だつてお前、雪が深くて行けるものか」

云つて、一日延ばし二日延ばして、その間にハイディが「今日は屹度行くのよ。おばあさんをあ



んまり待たすから」五六度云はない日はなかつた。たうさう四日目になつて、雪の原一面が氷のやうにから／＼に堅くなつた時に、ハイディは窓からさす久しぶりの輝かしい日光を浴びながら、高い腰掛に掛けて、お晝の食卓についてゐた。さうしてまた例の「今日は屹度」を云ひ出した。

するさ、おぢいさんは立ちあがつて、屋根裏からハイディの掛蒲團にしてゐる麻の大袋をミツて来て、ハイディに「こつちへおいで」云つた。外に出て見るさ、見渡す限り、きら／＼とした銀の世界である。雪におほはれた樅の木は今日は少しも動いてゐないで、日光を受けて美しく光つてゐる。ハイディは嬉しくなつて跳び廻りながら、

「おぢいさん、おぢいさん、樅の木がすつかり金色に銀色になつたよ」

さ何度も叫んだ。おぢいさんは小舎から大きな樅をひつぱり出して來てから、ハイディに樅の木のまはりをひき廻りさせられた。そねから樅ののりこんで、子供を膝の上につけ、麻の袋にすつ

かり包みまわして、左手でしつかり抱いた。そこで愈々右手で樅の棒をつかんで、足でひき突きするさ、樅は雪の斜面を非常な速さで下り出した。ハイディは鳥みたいに空を飛んでゐる氣がして、大きな聲を出して欣んだ。ペーテルの小屋まではほんのひき飛びだつた。おぢいさんはハイディを樅からかゝへ出して、袋をきりながら、

「さあ來たよ。家にお這入り。夕方になつたら歸るんだよ」

さう云つて、おぢいさんはハイディを別れて、樅を曳きながら山を登つて歸つた。

# 日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽  
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三  
 附屬幼稚園主事

## 日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
  - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
  - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催
  - 一、雜誌發行(毎月一回)
  - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
  - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
  - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
  - 會長 一名 會務ヲ總理ス
  - 主幹 一名 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス
  - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
  - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應ジ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

### 定價

ヶ月分	金參拾五錢	特等面一圓二等面一圓
半年分	金貳圓拾錢	廣一等面一圓一頁拾
一年分	金四圓貳拾錢	廣一等面一圓一頁拾
拾貳冊送	金拾五圓	廣一等面一圓一頁拾
拾貳冊送	金拾五圓	廣一等面一圓一頁拾

（外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）  
 昭和三十二年六月十五日印刷納本  
 昭和十三年六月十五日發行

### 不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋 惣三  
 發行所 柴山 則常  
 印刷者 柴山 則常  
 印刷所 會社 杏林 舍  
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
 東京市小石川區大塚町三十五  
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
 振替口座東京一七二六六番

### 發行所 日本幼稚園協會

### 注 文 規 定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。(郵券代用の場合には換へて願ひます)
- 一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
- 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に前金切の印章を押捺いたしますから其節は見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

# 夏休み前から

## お休みへかけて

涼しいおみやげ品の手技材料と  
お子達の歡ぶ保育品のいろく



◇團 扇——淡い紅・黄・紫・緑・水色の五

種取合、何れも貼紙クレオン等で意匠して用ふ

十 組 金 三十 錢

◇紙 舟——茶ポルに印刷した厚紙細工

剪つて開紙で止め、クレオン・色テープ等で彩色

十 個 金 二十五 錢

◇後藤連繫紙時計——幼兒の標做遊戲に好適の腕時

計 四十人分一箱 金 三十 錢

◇七夕祭用品——五色短冊五枚・提灯用紙二枚

銀の星五枚一組 五 十 組 金 一圓五十 錢

◇盆提灯用織紙——形は種々作れます、昔懐しい

一切子燈籠。色は赤と水色絞の二種 中紙共五十組 金 一 圓

◇木 舟——木製のお舟、エナメルで仕上

げ水に浮かせる 一 個 金 十五 錢

◇風車用紙——一〇〇枚

◇金魚と風鈴——後藤牧星先生案 金 十二 錢

◇オランダ風車——後藤牧星先生案

十 組 金 二十五 錢

十 組 金 十二 錢

# 食館レベレフ 社會式株

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社 本  
番七二八三(33)話電・五町後備・區東・阪大 店 支  
番八三九一(24)話電